

41401

教科書文庫

4
810
31-1939
2000.0 22369

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



小學國語讀本

尋常科用

卷十二

文部省

資料室

375.9
M064

青島大學
圖書館



尋常科用

小學國語讀本 卷十二

文部省



目録

第一	玉のひびき	一
第二	出雲大社	三
第三	古代の遺物	八
第四	支那の印象	十六
第五	孔子と顔回	二十九
第六	西山莊の秋	四十二
第七	鎌倉	四十六
第八	黄瀬川の對面	四十九
第九	末廣がり	五十三
第十	姫路城	六十三
第十一	鳥居勝商	七十三
第十二	初冬二題	七十六
第十三	機械化部隊	八十
第十四	ほまれの記事	八十五
第十五	萬葉集	九十五
第十六	奈良	百三
第十七	修行者と羅刹	百七
第十八	歐洲めぐり	百十七
第十九	リヤ王	百三十五
第二十	裁判	百五十三
第二十一	雪残る頂	百五十九
第二十二	太陽	百六十
第二十三	關孝和	百六十五
第二十四	白洲燈臺	百七十三
第二十五	雪國の春	百七十九
第二十六	靜寛院宮	百八十五
第二十七	山ざくら花	百九十四

尋國十二



第一 玉のひびき

明治天皇御製

明治十一年以前述懐
古のふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國は

いかにと

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが

心ともがな

明治四十年神祇
目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心のまこと

なりけれ

明治四十三年日
さしのぼる朝日の如くさわやかにもたまほしき

は心なりけり

第一 玉のひびき

あしひきの山のは出づる月かげに大海原の波を
 見るかな
 高殿の窓てふ窓をあけさせてよもの櫻のさかり
 をぞ見る

昭憲皇太后御歌

人知れずおもふ心のよしあしも照らし分くらむ

天地の神

朝ごとにむかふ鏡のくもりなくあらまほしきは

心なりけり

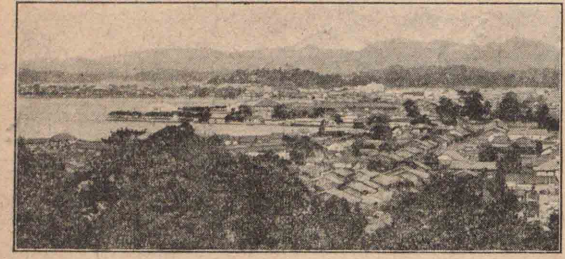
廣前にたまくとりてうねび山たかきみいつを

あふぐ今日かな

大正十二年

大宮の火桶のもと寒き夜に御軍人は霜やふむ
 らむ

第二 出雲大社



松江を發したる汽車は、風光畫の如き
 宍道湖のほとりを走ること約四十分、や
 がて新川を渡り、更に進みて斐伊川の鐵
 橋にかゝる。かたはらなる人のいふや
 う、此の川は古の簸川にして、かのをろち
 退治の傳説あるは、此の川の川上なり。と。
 今市を過ぎ、大社驛に着きぬ。停車場

の外に出づれば、秋晴の空はあくまで澄みて暖さ春の如し。参詣にはよき日なりなど思ひつゝ、人々の群にまじりて行けば、大鳥居ありて我が行手に立つ。やがて打續く松並木の間を過ぎて境内に入り、先づ拜殿の前にぬかつく。

昔、大國主命おほくにぬしのみこと、國土を開き人をなつけて、威勢四隣に振るひ給ふ。時に天照大神あまてらすおほみかみの使者建御雷命たけみかづちのみこと、此地に來りて申し給ふやう、

「大神おほみかみのたまはく、此の葦原あしはらの中つ國は、我が子孫の治むべき所なり。」と。快く此の國をたてまつり給ふや、如何に。」

大國主命答へて申さく、

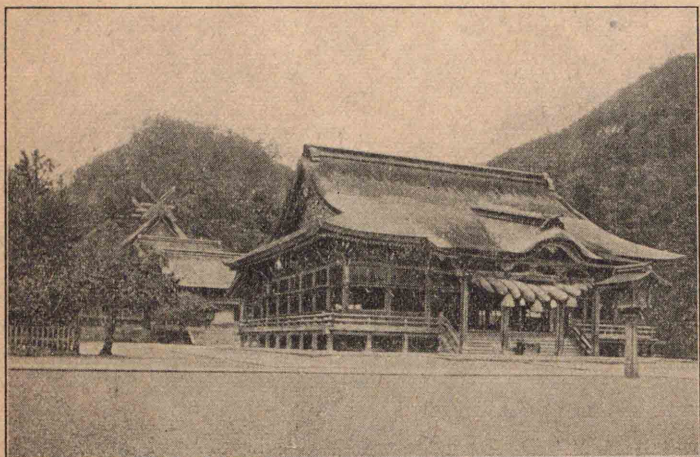
「我もとよりいなみ奉る心なし。我が子事代主ことしろぬしと

はかりて答へ申さん。」

此の時事代主命は、すなどりのため美保崎みのさきといふ所にいまししが、使を得て急ぎ歸り、父君に申し給ふ。

「かしこし。仰のまゝにたてまつり給へ。」

こゝにおいて大國主命、此の葦原の中つ國を皇孫に



模規

たてまつりて、どこしへに天つ日嗣あまひつぎを護りまつら
ん。

と申して、恭しく國土をたてまつり給ひぬ。大神、其の真心の厚きを賞して、命のために壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。これ即ち出雲大社の起源なり。

此の社は、建築様式の甚だ古きと、規模の大なるとを以て世に知らる。千木のほとりを飛ぶ鳩はとのさながら、雀の如くに見ゆるも、社殿の高大なるためなるべし。

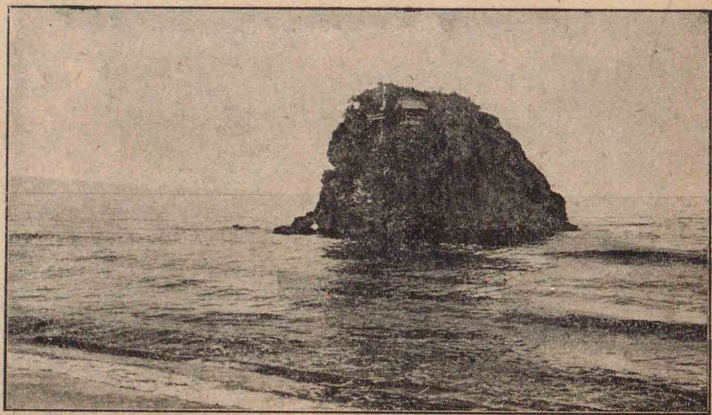
寶物殿に入りて拜觀するに、火きりぎね、火きりうすといふものあり。太さ中指ほどなる細長き棒と、

尋國十二

尋國十二

幅十四五糎、長さ一米ばかりの厚板となり。此の棒を此の板の上にて、きりをもむが如く廻せば、まさつによりて火を生ず。此の社にては、今も太古の法に従ひ、これによりて火を作るといふ。

境内を出でて、海岸に至る。稻いな佐の濱といふ所なり。かの建御雷命が犬國主命と會見し給ひしは、此の所なりといふ。折から日は地平線に近づきて、雲も水も金色に輝き、美しさいふばかりなし。な



ぎさに立ちて昔をしのべば、そのかみ此の所にいかめしく向かひあひ給ひけん神々の姿、今まのあたり見るが如く、打寄する波の音さへ何事をか語るに似たり。

第三 古代の遺物

私たちが野外を散歩してゐると、時に畠の上などに、貝殻が白く散らばつてゐるのを見かける。なほ其の邊をよく探すと、斧の形をした石や、矢じりの形をした石のかけらを見つけることがある。かういふ石を昔の人は、天狗の作つたものだとか、雷の落し

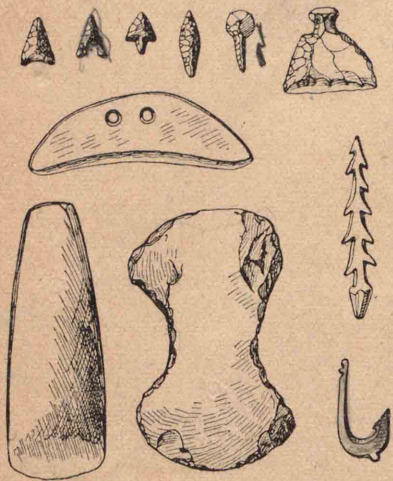
て行つたものだとか言つたが、もちろんそんなことのあるはずはなく、やはり人間の作つたものなのである。

智
屬(属)

世界のどこの地方でも、人智の開けなかつた大昔には、人はまだ金屬を使ふことを知らず、ごく手近に

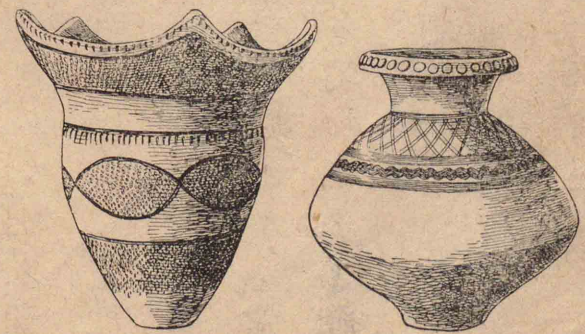
ある石で斧や矢じりを作り、又、獸の骨で針や釣針などを作つたのであつた。かういふ時代を石器時代といふのである。

同じ石器時代にしても、こ



磨 整 模

く古いところでは、たゞ石を割つたまゝの形の整はないものを使用してゐたが、時代が進むにつれて、だんく美しく磨いたものも作られるやうになつた。さういふ石器になると、ずゑぶん精巧で、今日これをまねて作らうとしても、ちよつと出来さうにもないのがある。又壺や鉢など、いろくの形をした土器や、其のかけらが発見され、其の表面になは目のやうな模様の附いたものなどがある。



二

尋國十二

尋國十二

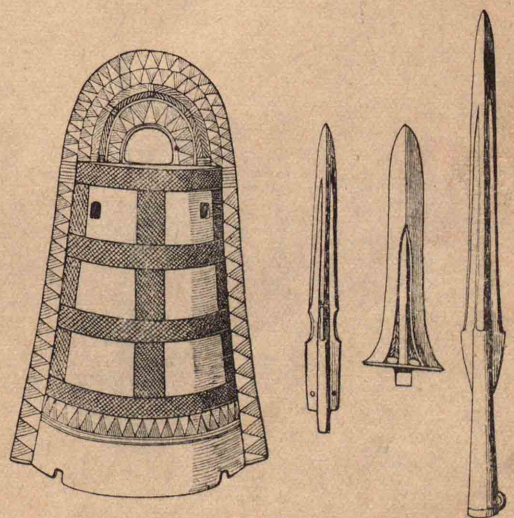
鑛

かういふ時代の人々は、石の斧や、石の矢じりの附いた矢をたつさへて山野に狩をし、獸骨で作つた釣針などで魚を取り、又、貝を拾つて生活してゐた。彼等の住んでゐた所には、自然大きなはきだめが出来、當時捨てられた貝殻が今日まで残つて、島の上などに現れ、私たちの目につくのである。さういふ所を貝塚づかと名づける。さうして、其の貝塚及び附近から、當時の住民の使用した石器や土器などが、たまぐ見されるわけである。

石器時代は、ずゑぶん長く續いた。しかし、人智が次第に進んで、何時の間にか、鑛石から金属を取出し

て使ふ時代がやつて来た。それも一番初に使はれたのは銅で、其の後に銅とすずとをまぜた青銅が使はれ、最後に鐵が使はれるやうになつた。銅及び青銅で利器を作つた時代を青銅器時代といひ、鐵の利器を使ふやうになつた時代を鐵器時代と名づける。

我が國へは、アジヤ大陸から青銅器を作ることが傳へられ、従つて青銅の劔や、ほこや、矢じりや、又銅鐸



尋國十二
尋國十二

貴

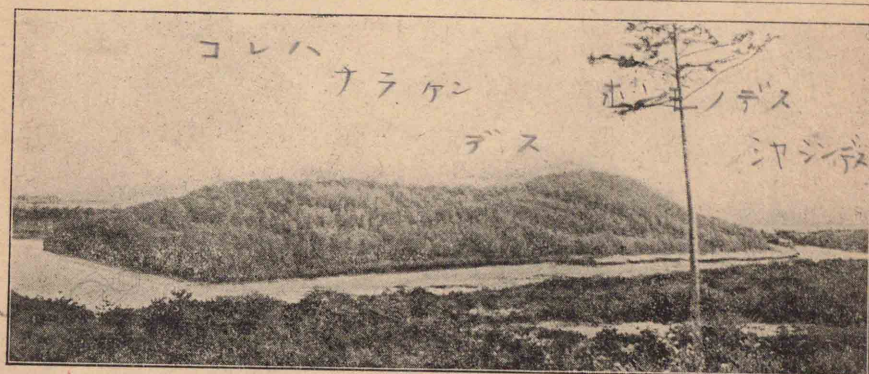
といつて釣鐘のやうな形をした器物が発見されるのであるが、我が國の青銅器時代は極めて短く、やがて次の鐵器時代にはいつたものと考へられる。

鐵器時代といへば、かうした古い時代から、實に今日の我々の時代まで續いてあるわけで、従つて其の遺物は殆ど無數といへる。しかし、其の中でも、最も古い時代に屬するものとして貴重なのは、古墳かふんと、其の中から発見される遺物である。

古墳といふのは土まんどちゆうに類する塚で、それには大小いろいろあるが、形状は圓形が普通で、まれに方形のものがあり、特に我が國特有のものとして

稱

掘



前方後圓の古墳と稱へられるものがある。前方後圓の古墳は、へうたんを縦に割つて伏せたやうな形であつた。前の方が角ばつてをり、後の方が圓くなつてゐる。周圍には、大い堀がある。此の古墳の大きなものになると、長さが數百米に及び、堀が二重にも三重にも廻らされてゐる。さて、一般にかうした古墳の内部は、どうなつてゐるであらうか。在來何かの機會に發掘されたところ

尋國十二

では、石で築いた室や石棺せきくわんが現れ、死者と同時にほりむつた曲玉管玉などの裝飾品や、鏡、劔かたな、甲冑かっちうなどが出た。又、古墳の外部からは埴輪はにわの人形などが發見され、私たちに、あの野見宿禰のみのすくねがそれを工夫したといふ歴史を思ひ合はさせる。かうした遺物を調べることによつて、古墳の年代を考へることが出来るのである。

元來昔の歴史を知るには、其の頃に書かれた物をもととして研究するのであるが、かういふ石器土器を始め、古墳などから出る古代の遺物も尊い材料となるのであるから、私たちはどこまでもこれを大切

に保護し、後世に傳へなければならぬ。今日これらのものが、或は博物館に保存され、史蹟しせきや國寶などに指定されてあるのがあるのは、かうしたものを永遠に保存しようといふ精神であることを忘れてはならない。

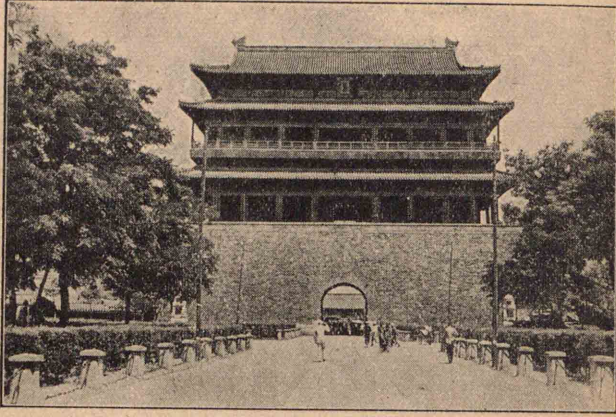
那 指

第四 支那の印象

北京市街

忽んえんたる城壁を高くめぐらした北京は、見るからに雄大だといふ感じを與へる。市街は南北二つに仕切られ、北を内城、南を外城といつてゐる。内

尋國十二

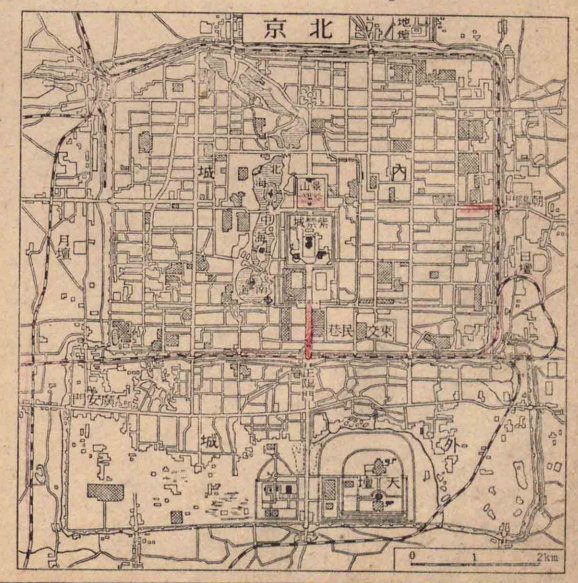


外二城の界もまた城壁である。城壁の所々に城門があり、壯麗な樓閣ろうかくがこれを飾つてゐる。内城の正門正陽門の堂々たる姿が、先づ旅行者の目を引く。

く、昔の皇居紫禁城が何よりも目立つて見える。壯麗な宮殿が幾むねも立ち並び、其の黄金色の瓦屋根が青空に輝かしい。北海・中海・南海と續く池は、あた

廣 壇 祭

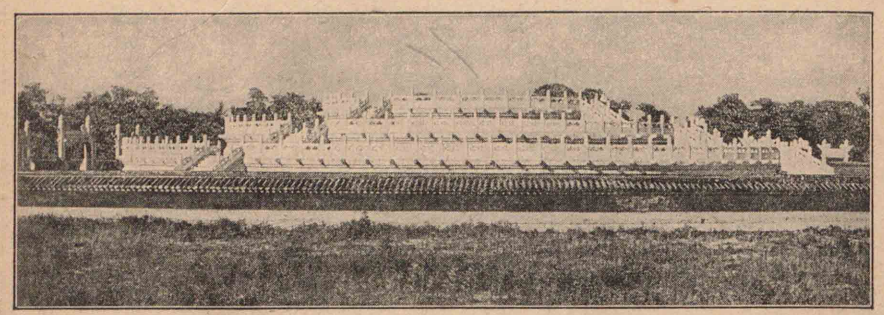
かも地上に鏡でもはめ込んだかと思はせる。夏は、池一面はすの花ださうだ。東、朝陽門の彼方に遠く通州があり、南西、廣安門の彼方に、これも遠く蘆溝橋があるのである。



北京には、日壇、月壇、天壇等の祭壇があつて、歴代の皇帝が天を祭られた昔がしのばれる。なかんづく、なかなづくと、ままらさびしい程静かな所である。大理石でた、ま

尋國十二

列 郭



れた圓形の祭壇の前に立つと、諸官が威儀を正して列なり、奏樂の中に天子が恭しく祈られたといふ夜明前の神祕な儀式が、目の前に浮かぶやうな氣がする。
此の外、東交民巷だの、天橋路だの、胡同だの、支那だけに變つたものや變つた名前がある。
東交民巷とは各國公館のある所で、周圍に銃眼のついた壁をめぐらし、外郭に空地を存する特殊地帯である。

こゝにはいると、道路も、庭園も、建物も、すつかり西洋風である。

天橋路には露天市場があつて、日用品のありとあらゆるものが雑然と並んでゐる。そこらにランプがあり、めがねがあり、天ぷらのにほひがたゞよひ、古着屋の軒に小鳥がさへづり、ほこり風が古雑誌のページをめくつてゐる。

胡同は路次のことて、かういふ所に北京の古風が残つてゐるのがおもしろい。一輪車の水賣が通るとき、床屋が通る。みんなのんびりした鳴り物を鳴らしながら通つて行く。門口から子供

がたこを持つて出ると、そこにゐたあひるがよちよちと逃出す。どこかで、花嫁行列のラツパが響いたりする。

楊柳ヤウリウの村

どこへ行つても、楊柳を見るのが支那である。さうして、此の楊樹柳樹の十株か二十株生ひ茂る所には、大てい農家が四五軒かたまつてゐる。

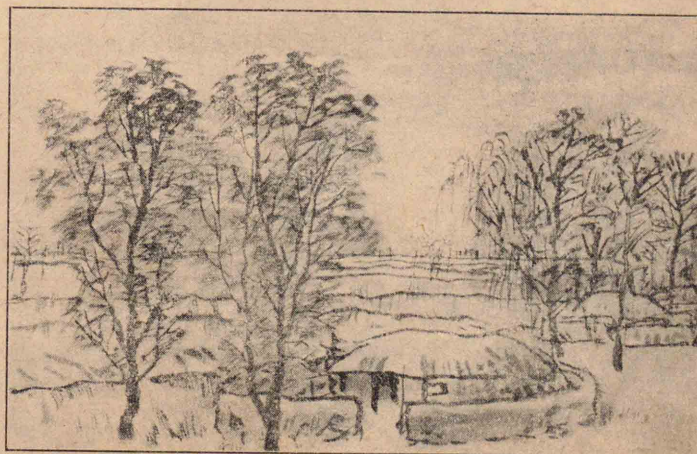
枝の上のびて行くのが楊であり、上から下へたれ下るのが柳である。どちらも、其の枝其の梢は、風になよ／＼となびき動いてゐるが、幹は動くことな／＼、十分土中に根を張つてゐる。かうした楊柳の陰

童

能 畑

に、農夫はさゝやかな土の家を構へる。水草を追ふ牧童は別として、大人は春の種まき、秋の取入れにはげんで餘念がない。五千年の昔から、自ら耕して食ひ、自ら掘つて飲むといつた簡単な生活を、其のまま、今日に持越して来た彼等は、田畑のことにかけて本能的な執着と、眞剣な考を持つてゐる。

星をいたゞいて出で、月を踏んで歸るのが田家の



尋國十二

生活である。たま／＼汽車の窓から見渡すと、朝どんなに早くても、あちらこちら、三人五人、すき／＼はを取つて、せつせと働いてゐるのを見かける。附近にそれらしい楊村、柳村がないところから察すると、ずあぶん早く、遠くから出かけて来たものだと感心させられる。

彼等は終日黙々として働いてゐる。しかし、土地は殆ど無限に廣がつてゐるのであるから、あせつたところ、追ひつくものではない。營々と働く彼等に、どこか又、氣の長いところがあるのも、一つは此の廣大な自然のせゐであらう。其の上、しば／＼飢饉

洪

があり、洪水があり、兵亂があつても、昔から彼等に對する救の手はどこからもなされなかつた。従つて人を頼まず、世をうらまず、自分の事は自分でするといふ心掛が、田家には行きわたつてゐる。

しかも彼等は、のんきに其の生活を樂しむことを知つてゐる。泥まみれの仕事着のまま、小鳥のかごをさげたり、小鳥を止り木に止らせたりして、村外れの楊柳の陰に集り、日暮れまで其の鳴かしくらに打興ずる。一日の勞苦を、美しい鳴き聲に打忘れるのである。田園自ら樂しみあり、魚鳥また相親しむの平和境を、こゝに見るやうな氣がする。

外

勞

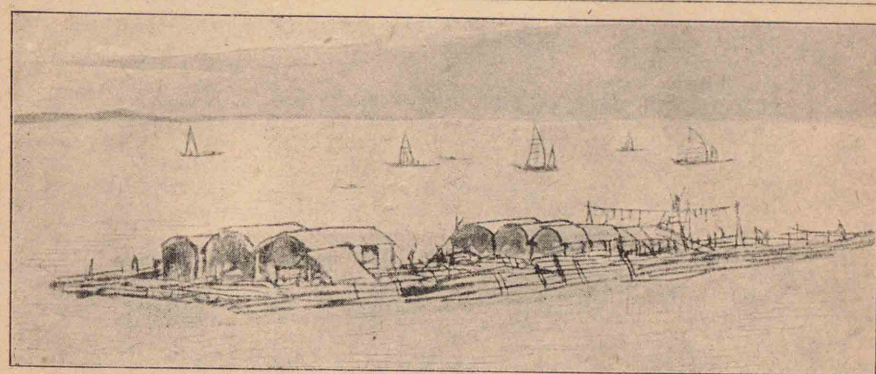
江

長江の筏いかた

いづくたる長江に最もふさはしいのは、筏流しの光景である。

筏は、たくさんの丸太を幾重にも組合はせた、すばらしく大きなものである。見たところ、水面とすれすれになつて流れてゐるが、それは筏の一部分で、大部分は水面下にあるといふ。

筏の上には、板ぶき、又は竹アンペラなどで作つた小屋が、幾軒となく長屋のやうに建てられてゐる。荷主、炊事夫、舵夫、雜役夫から、村の客まで幾十人が、それに乗つてゐる。せんたく物の上着やも、引など



が、風にひるがへつてゐる。白雲の行方でも見てゐるのか、大空を仰ぎながら、くはへぎせるをした老人の姿も見受けられる。最も大きな筏になると、村中全體が乗つてゐるのではないかと思はれる程多人數である。

月明の夜など、かうした筏の小屋といふ小屋に、紅緑のとうろうを美しく點ずるのがある。胡弓こきゅう笛ふえたいこの鳴り物入りではやし立てる。

増級

とうろうの色鮮かに、江上に影をうつすさまは、畫にもかきたいくらゐである。

かういふ大きな筏が、時に十も十五も列を作つて江心を下る。何しろ揚子江やうすは、其の對岸を望んでも陸らしい物を見ず、たまく陸と見たのは、江上の島の水際に生ひ茂る楊柳の林だつたりする程廣いのである。江口から漢口までの一千軒が揚子江の下流であつて、増水期には一萬トン級の汽船が樂々と航行するのである。だから、こんな筏の十や二十が續いて下つたからとて、少しもじやまになるわけではない。

かうしたすばらしい、しかもものんきな筏流しにも、やはり時代の波は押寄せるものと見えて、近頃は發動機船にぼつぼと威勢よく引かせながら、三つ、四つ、七つと列をなして下るのがある。

筏は江を下り、江蘇省鎮江の金山寺あたりに着いて、大きな貯木場にはいる。材木と材木とをくくり附けた竹づながぼん／＼断切られ、ジャンクで南京なんきんや上海方面しゃんはいに運ばれて行く。

それでは、かうした大きな筏は、一體どこからくり出されるのであらうか。

大筏は、湖南省の洞庭湖とうていに先づ出現する。思ふに、

尋國十二
尋國十二

風情

湖南・貴州などの奥地から出る材木が、それ／＼其の地の流によつて此の湖水に流され、こゝで大きな筏に組まれるのであらう。洞庭湖は、上海から千二三百杵もさかのぼつた所にある海のやうな湖水であるから、かうした大筏の編成にはもつて来いといつた場所である。かくて筏は、洞庭の岳州から下つて本流に出る。やがて有名な赤壁を下り、漢陽を下る。此の邊一帶の江上に、特に筏流しの風情のよく味ははれる所が多い。

第五 孔子と顔回

予

(一)

「あゝ、天は予をほろぼした。天は予をほろぼした。七十歳の大聖孔子は、弟子顔回の死にあつて、聲をあげて泣いた。

三千人の弟子の中、顔回ほど其の師を知り、師の教を守り、師の教を實行することに心掛けた者はなかつた。これこそは、我が道を傳へ得るたゞ一人の弟子だと、孔子はかねてから深く信頼してゐた。其の顔回が、年若くてなくなつたのである。

「あゝ、天は予をほろぼした。天は予をほろぼした。まさきまさきに後繼者を失つた者の悲痛な叫びでなくて何

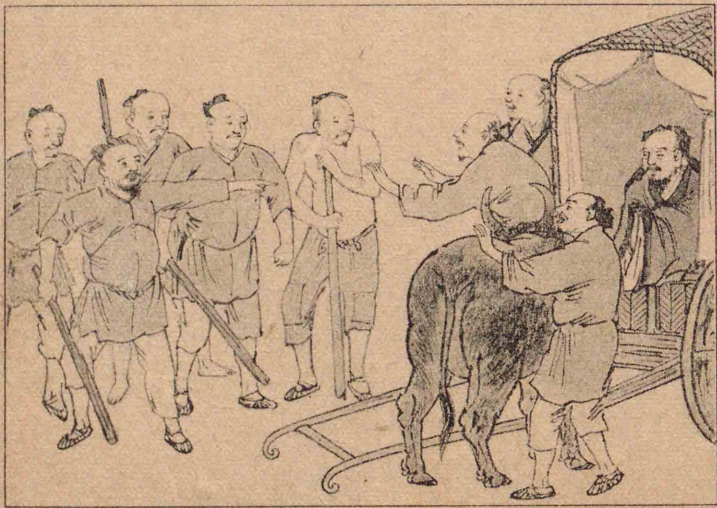
繼

であらう。

(二)

十數年前にさかのぼる。孔子が、弟子たちを連れて匡きやうといふ所を通つた時、突然軍兵に圍まれたことがある。かつて陽虎やうこといふ者が、此地で亂暴を働いた。不幸にも、孔子の顔が陽虎に似てゐたところから、匡人は孔子を取圍んだのである。此の時

暴



おくれればせにかけつけた顔回を見た孔子は、ほつとしながら、

「お、顔回。お前は無事であつたか。死んだのではないかと心配した。」

と言つた。すると顔回は、

「先生が生きていらつしやる限り、どうして私が死ねませう。」

と答へた。

孔子は五十餘歳、顔回は一青年であつた。我が身の上の危さも忘れて、孔子は年若い顔回をひたすらに案じ、又、顔回はこれほどまで其の師を慕つてゐた

厄

糧

修徳生

のであつた。

(三)

それから數年たつて、陳蔡の厄があつた。孔子は楚の國へ行かうとして、弟子たちと共に、陳蔡の野を旅行した。あいにく此の地方に戦亂があつて、道ははかどらず、遂に糧食が盡きてしまつた。七日七夜、孔子も弟子も、ろくろく食ふ物がなかつた。

困難に際會すると、自ら人の心がわかるものである。弟子たちの中には、ぶつ／＼不平をもらす者があつた。生一本な子路が、どがり聲で孔子に言つた。「一體徳の修つた君子でも困られることがあるの

ですか。」

徳のある者なら、天が助けるはずだ。助けないところを見ると、先生はまだ君子ではないのか。——子路には、ひよつとすると、さういふ考が湧いたのかも知れぬ。孔子は平然として答へた。

「君子だつて、困る場合はある。たゞ困り方が違ふぞ。困つたら悪い事でも何でもするといふのが小人である。君子はそこが違ふ。」
子貢といふ弟子が言つた。

「先生の道は餘りに大き過ぎます。だから、世の中が先生を受容れて用ひようとしません。先生は、

容

少し加減をなさつたらどうでせう。」

孔子は答へた。

細

「細工のうまい大工が、必ず人にほめられるときまつてはあない。ほめられないからといつて、腕前を加減するのが果してよい大工だらうか。君子も同じことだ。道の修つた者が、必ず人に用ひられるとはきまつてあない。だからといつて加減をしたら、結局、人に用ひられるためには、道はどうでもよいといふことになりはしないか。」
顔回は師を慰めるやうに言つた。

「世の中に容れられないといふことは、何でもあり

富

ません。今の亂れた世に容れられなければこそ、ほんたうに先生の大きいことがわかります。道を修めないのは君子の恥でございますが、君子を容れないのは世の中の恥でございます。此の言葉が、孔子をどんなに満足させたか。顔回よ。お前が富貴であつたら、予はお前の家の家令にならうぞ。

(四)

仁

孔子は弟子に道を説くのに、弟子の才能に應じてわかる程度に教へた。孔子の理想とする仁[○]についても、或者には人を愛することである。と言ひ、或者に

述易

己

は「人の悪口を言はぬことである。」と説き、或者には「むづかしい事を先にすることである。」と教へた。何れも「仁」の一部の説明で、其の行ひ易い方面を述べたのである。ところで顔回には、

己[○]に克^かつて禮に復^かるのが仁である。

と教へた。あらゆる欲望にうちかつて、禮を實行せよといふのである。其の實行方法として、

非禮は見るな。非禮は聞くな。非禮は言ふな。

非禮に動くな。

と教へた。朝起きるから夜寝るまで、見ること、聞くこと、言ふこと、行ふこと、一切禮節に従ひ、禮節にかな

へよといふのである。こゝに「仁」の全體が説かれてある。さうして、顔回なればこそ、此の最もむづかしい教を、其のまゝ、實行することが出来たのである。

(五)

孔子は顔回をほめて、

「顔回は予の前で教を受ける時、ただまつてゐるので、何だかぼんやり者のやうに思はれるが、さて退いて一人である時は、師の教について何か自分で工夫をこらしてゐる。決してぼんやり者ではない。」

と言つてゐる。又、

會

「他の弟子は、教についていろいろ質問もし、それで予を啓發してくれることがある。しかし、顔回は質問一つせず、すぐ會得して實行にかゝる。彼は一を聞いて十を知る男だ。」

とも言つてゐる。

孔子がよく顔回を知つてゐた如く、顔回もまたよく其の師を知つてゐた。顔回は孔子をたゞへて、「先生は仰げば仰ぐほど高く、接すれば接するほど奥深いお方だ。大きな力でぐんぐんと人を引っぱつて行かれる。とても先生には追いつけないから、もうよさうと思つても、やはりついて行かざ

るを得ない。私が力のあらん限り修養しても、先生は何時でも更に高い所に立つておいでになる。結局、足もとにも寄りつけないと感じながら、ついて行くのである。



と言つてゐる。顔回なればこそ、偉大な孔子の全面をよく認めることが出来たのである。

(六)

「先生が生きていらつしやる限り、どうして私が死ねませう。」

過

と言つた顔回が、先生よりも先に死んでしまった。

或日、魯の哀公が孔子に、

「御身の弟子の中、最も學を好む者は誰か。」

と尋ねた。孔子は、

「顔回といふのが居りました。學を好み、怒をうつ

さず、過も二度とはしない男でございましたが、不

幸にも短命でございました。」

と答へた。

「怒をうつさず」といふ言葉に、あの陳蔡の厄で、子路や子貢が、君子でも困られることがあるのですか。とか、先生の道は餘りに大き過ぎます。など不平がまし

く言つた時、顔回だけが平然として、ひたすらに孔子をたゞへ、孔子を慰めたことが思ひ出されるではないか。

第六 西山莊の秋

三日ほど降續いた秋雨がからりと晴れて、今日は一だんと冷氣が加り、かすかな寒さをさへ感じる。雨に洗はれた築山のくまざさが、濃い緑の葉に白い筋を見せ、心字の池に枝をさしのべた楓は、もう色づき始めてゐる。

大日本史の草稿さうかうに加筆してゐた光圀みつくには、ふと思ひ

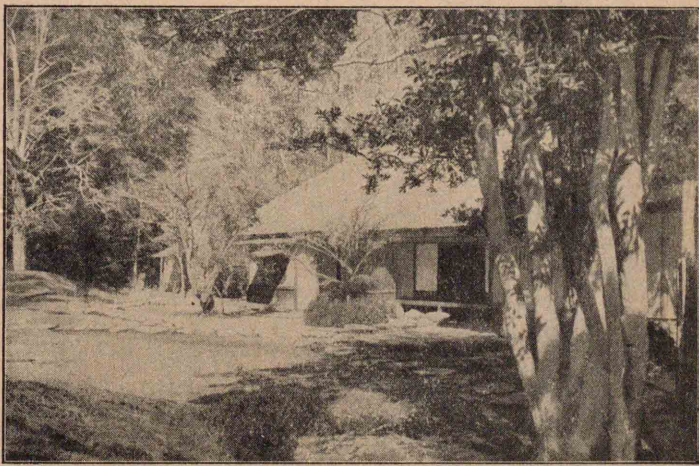
文

額 局

出したやうに、文箱から一通の書面を取出して静かに讀返した。それは楠公なんの碑ひを建てに行つてゐる家臣からの手紙である。湊川みなとの建碑もどゞこほりなくすんだ。忠臣の靈れいは慰められ、功績は一だんと明らかになつた。何年前のことであつたらう、自分が江戸の屋敷で史記を讀み、史書の力の偉大なことに感動したのは。それから歴史編纂へんさんを思ひ立ち、始めて史局を置いて學者を集めた時の喜び、彰考館しょうかうを設け、自ら其の額を書いた時の輝かしい希望、それらが今新たな感激となつてよみがへつて来る。かうして大義名分たいぎなぶんが正され、忠臣義士の真心があらはれ、皇

國の姿が次第に明らかになつて行くのである。

しばし思にふけつてゐた光圀が、我にかへると突然人聲が聞えて來た。それは聞きなれた里人の聲である。光圀は思はずほゝ笑んだ。縁傳ひに入口の方へ行くと、そこには青々とした野菜を持つた老人が二人頭を下げてゐる。光圀は喜んで老人たちを請じ入れ、野菜の出來や稲作の模様などを得意になつて



尋國十二

語るのを熱心に聞いた。

老人たちが歸ると、光圀は再び書齋の人となつた。自分が修史に志してからすでに長い月日を過したが、其の業は遅々として進まぬ。自分の餘命はいくばくもない。しかし、自分の氣持を知つてくれる子供たちや家臣の者は、後を繼いで必ずこれを成し遂げてくれるであらう。自分は此のまま、世を去つても、精神は永遠に生きる。尊皇の大義に、すべての人が目覺める時が必ず來るに違ひない。さう思ひながら、光圀はまた朱筆を取つて、史稿の訂正に取りか

繼

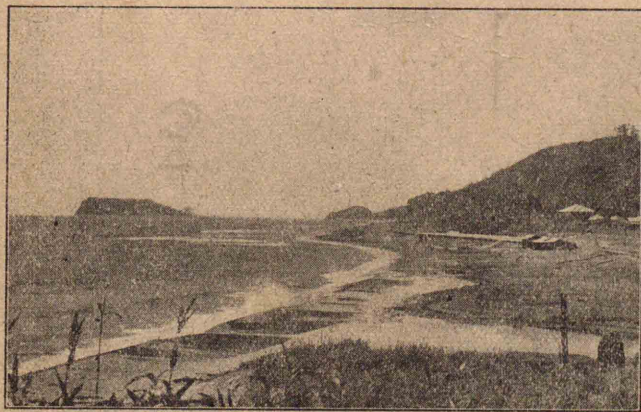
覺

暮れやすい秋の日は早くも池の彼方に没し、老松のあたりにはもう夕やみが迫つてゐた。

第七 鎌倉

七里が濱のいそ傳ひ、
稻村崎、名將の
劔投ぜし古戦場。

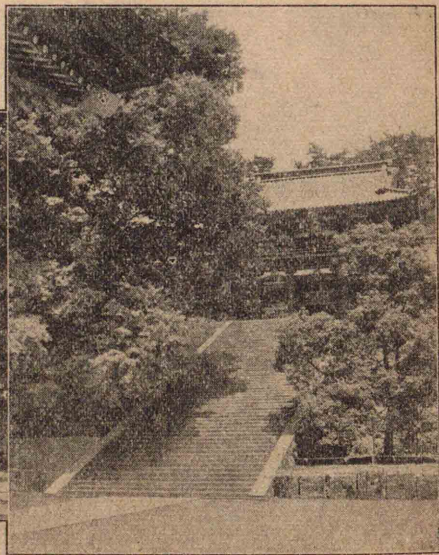
極樂寺坂越之行けば、
長谷観音の堂近く、
露坐の大佛おはします。



由比の濱邊を右に見て、
雪の下道過行けば、
八幡宮の御やしろ。

上るや石のきざはしの
左に高き大いふ、
問はばや遠き世々の跡。

若宮堂の舞の袖、
しづのをだまきくりかへし、



かへしし人をしのびつゝ。

鎌倉宮にまうでては、

つきせぬ親王のみうらみに、

悲憤の涙わきぬべし。

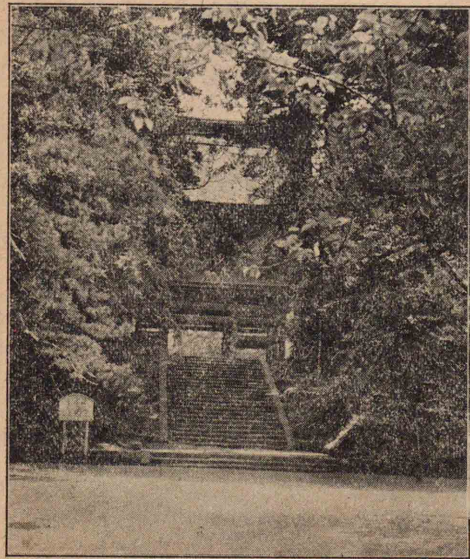
憤

歴史は長し七百年、

興亡すべて夢に似て、

英雄墓はこけむしぬ。

建長・圓覺古寺の



尋國十二

山門高き松風に、

昔の音やこもるらん。

第八 黄瀬川の對面

治承四年十月二十日、源頼朝平家の軍を富士川に

破り、二十一日、兵をかへして黄瀬川に陣す。此の日

思ひもかけぬに、武者二十騎ばかり、源家の白旗押立

てて彼方に現れたり。頼朝の家臣等あやしみて、

「如何なる人ぞ、名のり給へ。」

と呼ばはれば、年の頃二十餘りにして、文低く、色白く、

眼光鋭き一人の武士、たくましき馬にまたがりて進

二十

み出で、

鎌倉殿も忘れ給はぬなるべし。幼名牛若、今は九郎義經といふ者。奥州にありて、御旗あげの事承り、御力をそへ奉らんため、夜を日に繼ぎてはせ参じたり。鎌倉殿に傳へられよ。」
 と言ふ。頼朝其の由を聞き、かつは驚きかつは喜びて、家臣をして召入れしむ。



尋國十二

幕上

後

幕張廻らしたる陣營の中には、關八州の大名小名星の如く居並びたり。頼朝は上座にひかへ、弟の來るを今やおそしと待つところに、義經は胃かむどを脱ぎ、弓取直して幕の際にかしこまる。頼朝「これへ、これへ。」と招き寄せ、つくづくと其の顔を見て、先づ涙にむせぶ。義經も胸ふさがりて、言ふべき言葉を知らず。やゝありて頼朝涙を押さへ、

「我父上に後れ奉りし後は、しばらく伊豆いづの配所けいじょにあり、心に任せぬ事のみにて、御身が奥州に下りし由はかすかに聞及びながら、おとづれもせざりしに、兄弟の情を忘れず、一家の大事にはせ加りしこ

憤

修

と、此の上もなき喜びなり。昔、後三年の合戦に、新羅三郎殿、京よりはるく、兄八幡殿の陣中に参られし時、八幡殿は、なき父上のおはしましたるには、あらずや。とて、涙を流して喜ばれたりと聞く。我も、今父上のよみがへらせ給へるに會ひまゐらする心地す。今日より後は、力を合はせて源家の再興を計り、父上の御憤りを休め奉らん。

と言ひもあへず、涙をはらくと流す。義經も、涙にくれてしばし返事もせざりしが、やうやく顔を上げ、「配所へ御下りの後は、義經も鞍馬へ送られ、そこに十六歳まで修行したり。かくて深く心に決す

るところあり、はるく奥州に下りて秀衡を頼みぬ。今かくはせ参じたる上は、身命をなげうつて兄上のために盡くさん。

と言ふ。居並ぶ大名、小名、二人の心をおしはかりて、袖をぬらさぬはなかりけり。

第九 末廣がり

大名「此のあたりの大名でござる。太郎冠者あるか。冠者御前に。」

大名「大そう早かつた。汝を呼出したのは、餘の儀ではない。明日のお客の引出物に、末廣がりを出さ

うと思ふ。汝は大儀ながら京へ上り、急いで求めて参れ。

冠者「かしこまりました。」

大名「急げ。」

某

冠者「はつ。——さてく、某の主人は、立板に水を流すやうに物を言附けられるお方ぢや。先づ急いで参らう。とかく申すうちに、これはもう都ぢや。やうかと致した。某は末廣がり屋を存せぬが、何と致さう。や、物のほしい時は、大聲に呼ばはるものと見える。某も呼ばはつてみよう。末廣がりを買はう、末廣がりを買はう。」

わる者「これは京に住まひ致すわる者でござる。何者かは知らぬが、わい／＼わめいてゐる。一つ當つてみませう。——なう／＼、そなたは何をわいわいわめいてゐられるぞ。」

冠者「某は、田舎から参つた者でござる。末廣がり屋を知らぬによつてかやうに申すのでござる。」

わる者「某は、末廣がり屋の主人でござる。」

冠者「それは仕合はせなご。末廣がりはござらうか。」

わる者「如何にも。」

冠者「急いで見せて下され。」

わる者「心得ました。——はて、何を賣つてくれようか。
 や、よいことがある。これにからかさがあるから、
 これを賣つてやらう。——なうく、田舎の人、これ
 ぢや。

冠者「や、それが末廣がりでござるか。

わる者「如何にも。

冠者「なる程、廣げれば大きな末廣がりぢや。こゝに
 御主人の書附があるによつて、それに合つたらば
 買ひませう。

わる者「では、お読み下され。

冠者「先づ地紙よくとござる。

わる者「これ、地紙とは此の紙のこと。きつねの鳴く
 やうに、こんくといふ程、よく張つてござる。

冠者「骨磨き。

わる者「これ、骨磨きとは此の
 骨のこと。とくさをかけ
 て磨いてあるによつて、す
 べすべ致す。

冠者「要もかなめとしめて。

わる者「かう廣げて、此の金物
 でじつとしめるによつて、
 要もとしめてでござる。



冠者「さてく、書附に合つて嬉しうござる。して、價は如何程でござらうか。

わる者「高うござるぞ。

冠者「いくら程でござるぞ。

わる者「十兩でござる。

冠者「それは又高いことぢや。一兩ばかりになりま
すまいか。

わる者「なう、そなた人、其のやうに安いものではござ
らぬ。賣りますまい。

冠者「いや、十兩のうち、一兩ばかりも引いて下さらぬ
かといふのでござる。

わる者「よろしうござる。賣つて上げませう。

冠者「かたじけなうござる。さらば、さらば。

わる者「なうく、そなたは定めて主人持でござらう。

冠者「如何にも。

わる者「主人といふ者は、きげんのよいこともあり、悪
いこともある。若しきげんが悪うござつたら、か
うかうはやして舞はれたらよからう。

冠者「さてく、かたじけなうござる。——先づ御主人
に急いでお目かけよう。殿様、ござりまするか。

大名「太郎冠者もどつたか。

冠者「歸りました。

大名「大儀であつた。急いで見せい。」

冠者「はつ。」

大名「これは何ぢや。」

冠者「末廣がりでござります。」

大名「これが。」

冠者「はあ。殿様の御合點參らぬも道理でござります。かう致しますとぐつと廣がります。」

大名「如何にも大きな末廣がりぢや。して、あの書附に合はせてみたか。」

冠者「合はせましたとも。お読み下され。」

大名「先づ地紙よく。」

冠者「それこそ氣を付けました。これ此の通りきつねの鳴くやうに、こんくといふ程よく張つてござります。」

大名「骨磨きは。」

冠者「これ此の骨でござります。とくさをかけて磨いてあるによつて、すべく致します。」

大名「要もとしめては。」

冠者「かう廣げまして、此の金物でじつとしめます。大名「やい、太郎冠者。そちは末廣がり知らぬな。末廣がりとは、扇のことぢや。おのれは古がさを買うて来て、やれ末廣がり候の、骨磨きで候のと」

申しをる。すさりをらう。
 冠者「お許し下され。——さういはれ、ばなる程これは
 は古がさぢや。これはへんなことになりをつた。
 お、さうぢや。あれをはやして、ごきげんをなほ
 さう。

えい、く、

かさをさすならば、

人がかさをさすならば、

おれもかさをさ、うよ。

大名「や、おのれ、買物にはまんまとだまされて、申しわ
 けにはやしものをするとは。いや、く、あきれた

やつめ。や、これはこれは。

や、これはおもしろいぞ。

げにもさうよ、

げにもさうよの。

かさをさすならば、

人がかさをさすならば、

おれもかさをさ、うよ。

げにもさうよ、

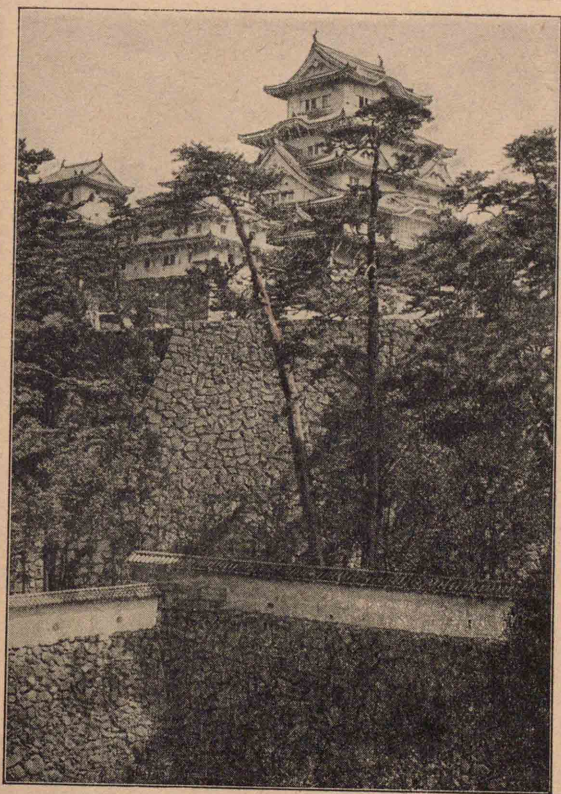
げにもさうよの。



第十 姫路城

守

大手の櫻門から三の丸にはいると、姫路城の天守閣は、姫山の老松の上に、其の正面を見せる。まことに白鷺城の名にそむかぬ美しい姿である。しかも、其の美の極致を、私は菱の門をくぐつて二の丸には



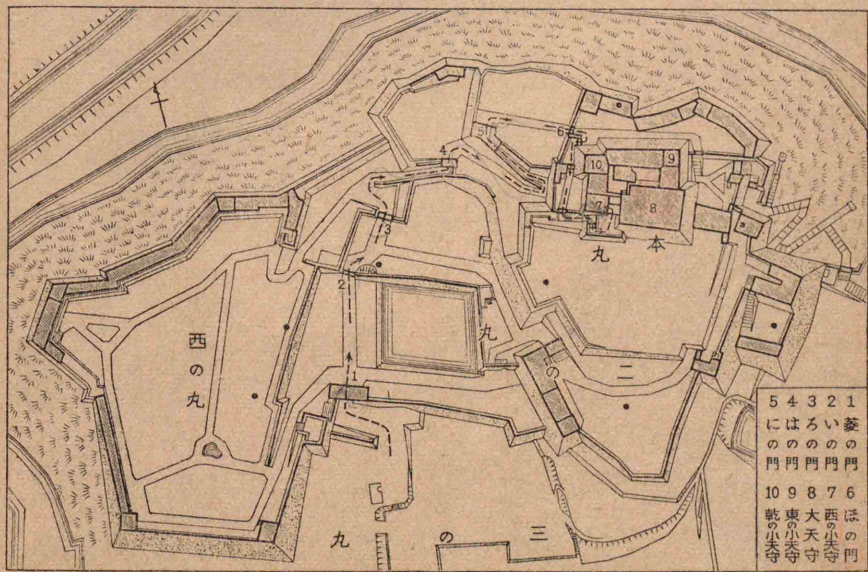
いつた瞬間に見出した。から堀をへだてて、やゝ右手に仰ぐ天守閣群は、五層の大天守を右に、三層の西の

尋常十二

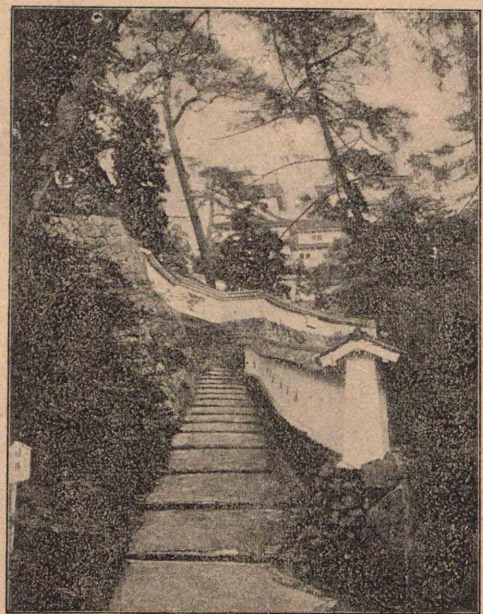
呈趣

小天守を中に、同じ三層の乾いぬの小天守を左に、如何にも調和よく、高い石垣の上に聳えてある。みやびやかな唐破風からすつきりした千鳥破風、それらが上下に重なり、左右に並び、千鳥がけに入りちがふさまは、まさにならかの亂舞といひたい。さうして、此の亂舞を一層美しくするものは、前景にそり立つ二本の松である。其のやゝまばらな梢越しに見えがくれして、白壁はいよゝゝ鮮かに、いらかはいよゝゝこまやかな趣を呈する。ところで、更に「いの門」をくぐり、「ろの門」をくぐつて、奥へくと進むにつれ、姫路城は、たゞ美しいといふ

だけではすまされなくな
つて来る。門をくゞる度
に、坂道は必ず右か左へ曲
折する。道に沿うて、時に
石垣・塀・櫓が層々と頭上
のしかゝる。まるで絶壁
の下を通る形だ。さうし
て、其の塀や櫓にうがたれ
た矢狭間・鐵砲狭間が、圓形
に、三角形に、正方形に、長方
形に、ちやうど怪物群の目



導迷



のやうに、私たちを見下すのである。どんな大軍が
押寄せたとしても、此の狭い谷底のやうな迷路に導
かれ、あの無数の狭間か
ら撃ちかけられ射す
められては、全くたまつ
たものではない。しか
も、道の行手々々は、すべ
て、嚴重な門である。

門をはいると、多くはそこに廣場がある。一般に
本丸への道は狭く、曲折してあるから、敵の寄手が若
し門を突破すれば、差當りかうした廣場になだれ込

激

まざるを得ない。さうして、激しく押合ひもみ合ふ彼等の足もとには、意外にも深い谷底が口をあけて待つてゐるのである。寄手が勢込めば勢込む程、恐らく此の見せかけの廣場が役立つに違ひない。

一きは堅固と見る「ほの門」を過ぎて、いよく本丸にたどり着いたと思ふと、そこには、いはゆる水の門が、第一から第六まで順々に待受けてゐる。數歩にして門があり、殆ど門毎に道が曲折する。頭上には、乾の小天守、西の小天守及び大天守が、東の小天守と四つ目に並び、互に腕を組合つて天に聳えながら、私たちを足もとにも寄せつけなまいといつたかつかう

固堅

である。

水の第五門は、大天守と西の小天守とをつなぐ渡櫓の真下になつてゐる。一度此の門をしめ切つたら、四つの天守閣は一箇の獨立した城郭となつて、これだけでも幾萬の敵に對して、いつかな動きさうに思へない。

外觀五層の大天守は、内から登ると七階であつた。さうして、あの美しいと見た天守の内部には、巨材が組合つて、薄暗い各階にも、ものすごく力闘してゐる。

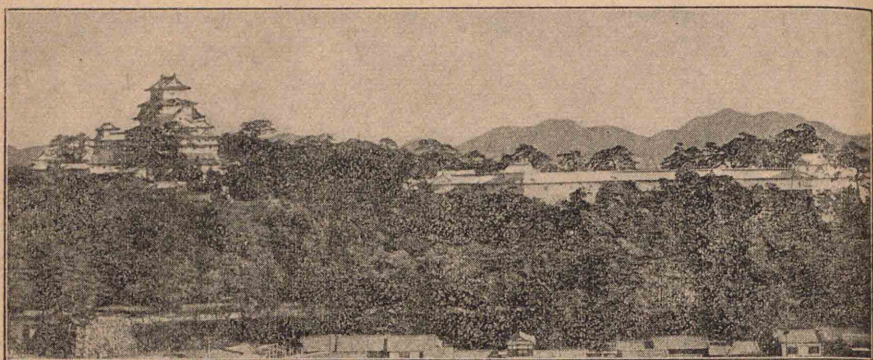
最上階から眺めると、姫路市街はもとより、飾磨平野が一目に見渡される。元來此の城は、飾磨平野の

據 石

中央や、北寄りの姫山、鷺山に據つて營まれたもので、地は南に飾磨港をひかへて瀬戸内海の運輸を占め、西に中國街道を受けて交通の要路に當つてゐる。秀吉がこゝに目を着けて城を築き、更に家康に信任された池田輝政が、百萬石の威望と將軍のうしろだてによつて、今日に見る優美にして堅固極まりなきものに造り上げた。大手の門は南を固め、からめ手の門は北東を押さへてゐるが、此の城の要害はむしろ西にある。眼下に見る西の丸の櫓々は、鷺山をあたかも長城の如くおほうて、西からの見すかしを防いでゐる。呼べば答へる間近さに、男山、景福寺山

享國十二

故



が、ちやうど海中の小島のやうに散在してゐる。いざといへば、これらの小山がすべて出城となつて、此の城郭の護となるのである。中國、西國の大藩を目的の上のこぶと見た家康が輝政をしてこゝに金城鐵壁を築かせたのは、まことに故あることと考へさせられる。

南方若しくは東方から望めば、優美其のものと思へる姫路城も、これを北から西から望む時、まるで様子

を一變する。本丸の據る姫山、西の丸の據る鷺山は屏風びやうぶの如く連なり、麓に三條の堀を廻らし、斧そのを知らぬ密林におほはれ、其の上にそり立つ天守閣はあたかも司令塔の如く、數十の櫓は層々と重なり、えんと連なつて、まさに飾磨平野に浮かぶ一大戦艦を思はしめるものがある。

美しい城だとは、誰もがいふ。しかも姫路城は、當時の最も堅固な城であつた。更にいへば、本丸、二の丸、西の丸の三丸が、これ程まで完全に残つて、今日我々に昔の姿を殆ど其のまゝに見せてくれる。まことに姫路城は、我が國城郭建築の粹であり、世界に

粹

誇るべき國寶である。

第十一 鳥居勝商かつあき

能善

天正三年五月、奥平信昌のぶまさ、徳川家康いえやすの命を受けて長篠城しのを守る。武田勝頼かつより大軍を率ゐて來り攻むれども、城兵善く戦ひて抜くこと能はず。攻めあくみて長圍の計を取り、さくを城外に廻らし、なはを城下の河中に張りて、城兵のひそかに逃れ出づるを防ぐ。城中には、わづかに四五日の糧食を餘せるのみ。援軍の來らん日もまた期すべからず。信昌將士を集めていはく、敵は長圍の計を取れるに、我は糧食殆

請 否

ど盡きたり。城を抜け出でて岡崎をかざきに至り、急を主公に告ぐる者なきか。と。鳥居勝商といふ者あり、進み出でて其の使たらんことを請ひ、約していふやう、事の成否は今より豫測すべからず、若し向かふの山のろしろしのあがるを見れば、幸にして城を出てたりと知るべし。三日の後また山上に來りて、援軍の消息を示さん。と。信昌大いに喜ぶ。

衛

時は十四日の月夜なり。黒き影は城の一方より現れ出で、ひらりとばかり水中にをどり入りぬ。なはに仕掛けたる鈴は、しきりに鳴る。敵の衛兵等、あやしみてあらためみんとするに、一老兵、水まさみにみ

見

なきれり。流をさかのぼる魚のなはに觸るゝならん。と言へば、さもあらん。とて止む。しばらくして、黒き影は向かふの岸に現れたり。

翌十五日の朝、勝商は山に上りてのろしをあげ、走りて岡崎に至り、家康に見えて援兵を求む。家康、直ちに勝商をして、織田おだ信長のぶながに見えて長篠城の急を告げしむ。信長、勝商の勞を賞し、かつ言ふ、我、明日援軍を率ゐて出發せんとす。汝も止りて我と共に行け。と。勝商、城内の苦しみを思へば、一刻も猶豫いっくよくすべきにあらずとて、直ちに引返す。

十六日、勝商は再び山上にのろしをあげ、次いで城

に入らんとするに、不幸にして敵兵に發見せられ、勝頼の前に引出さる。勝頼、勝商に向かひて言ふ、「明日城門に行きて、援軍來らず、速に降るべし。」と言へ。さうらば我必ず重く汝を賞せん。」と。勝商これを諾す。翌日、勝商、敵兵十餘人に圍まれて城門の近くに至り、城に向かひて高らかに呼んでいはく、「うれふることなかれ。徳川・織田二公、援軍を率ゐてすでに出發せらる。圍みの解けんは二三日のうちにあらん。」と。勝頼、怒りて直ちにこれを殺せり。

第十二 初冬二題

冬

柚子ゆず思ふ

今年も隣の柚子が黄ばんだ。
 かんとさえた冬空、
 太陽がまぶしく仰がれる。

かさこそと、

竹ぎをであの木の梢をつゝいてみた
 隣のをぢさんは、今もない。
 からたちの垣根越しに、ふとほゝ笑んで、
 「あげようか。」と、投げてくれた
 をぢさんは、よい人だった。

あの時、ざくつとおや指を皮に突立てたら、
しゆつと、しぶきがほとばしつて、
爪を黄いろく染めたものだった。

なつかしい柚子のかをり、
私はじつと梢を仰ぎ見た、

今は部隊長になつて、

遠い戦地に行つてゐるを、ちさんを思ひながら。

飯

朝飯

新づけの白菜

何といふみづくしきであらう。
かめば、さくくくと齒切れよく、
朝の氣分を新にする。

父も、母も、兄も、妹も、

だまつて箸を動かしてゐる。

そろつて健康に働く家族の、

楽しい朝飯だと思へば、

あたくかい御飯の湯氣が、

幸福に私たちの顔を打つ。

明けて行く朝、
窓ガラス越しに林が黒い。
からくくとどこかで荷車の音。
白い御飯から、
あたゝかみそ汁から、
ほかくと立上る湯氣を見つめながら、
私は、さくくと白菜をかむ。

第十三 機械化部隊

敵の機械化部隊の側面を突くため、全速力で右方へ廻つた我が戦車部隊は、午前七時十分、めざす場所

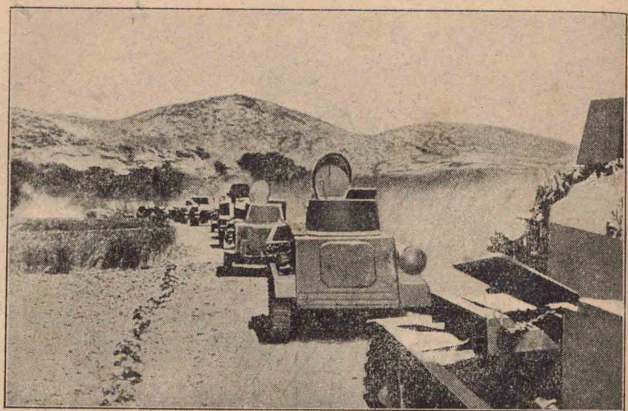
側



出る

我|彼|

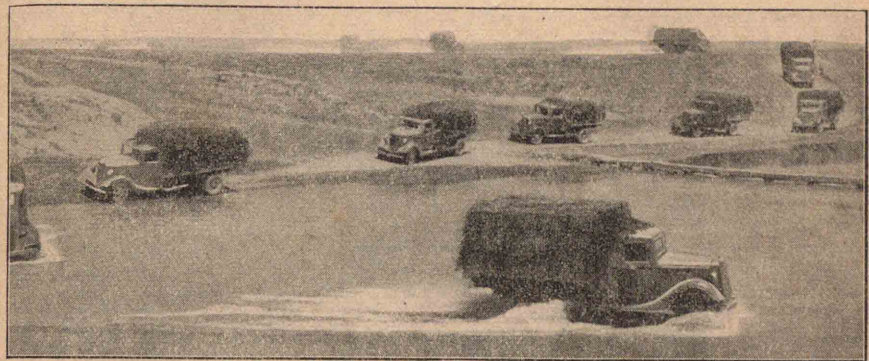
布|



に着いた。

盛に銃聲、砲聲が聞える。小高い所へ上つて、彼我の戦況を見ると、敵の正面に向かつた我が自動車部隊では、砲兵がすでに放列を布き、其の掩護射撃のもとに、歩兵工兵が散開して前進を續けてゐる。はるか向かふの岡にも、すごく砂ぼこりを上げて、敵戦車が十臺、十五臺、續々と現れて来る。我が砲兵はこれに砲弾をあびせかけ、散兵線からも、速射砲、歩兵砲等が、豆をうるやうな機

猛



關銃の音にまじつてとゞろく。すでに敵戦車の數臺はこはされ、數臺は火を吐いて進行の自由を失つてゐる。しかし、敵戦車は後から後からと現れる。戦機は熟した。

午前七時三十分、戦車部隊長は、砲塔高く指揮官にならへ。の旗を出して、前進し始めた。「それつ」とばかり、各戦車は、戦闘隊形を取つて敵戦車群の左側面におそひかゝる。部隊長車の第一發を合圖に、それぐ猛

敢

烈な射撃を開始した。周圍に破裂する敵砲彈を物ともせずぐんぐん距離をつめる。

地面がでこぼこしてゐるので車體は上下に激動するが、かねて鍛へに鍛へた我が腕、射撃は正確である。「ダウン。ダウン」といふ發射音に續いて、敵戦車の機關部にぱつくと火柱が立つたと思ふと、すぐ火えんを上げ始める。

次から次へと、新たな敵を求めて猛烈に撃ちまくる。右の方では、敵戦車目がけて鋼鐵の體當りをくらはせてゐる勇敢な我が戦車がある。止るもの、動くもの、火を吐くもの、歩兵、工兵の亂闘、彼我入亂れての一

大修羅場が展開される。味方の損害も相當はあらうが、勝利は信念にある。今こそ日本男子の面目を發揮すべき時だ。

戦の數十分は過ぎた。見ればもうくたる煙幕を張つて、敵は退却し始めた。すかさず、無線電話による我が機械化部隊長の追撃命令が下る。戦車群の猛進におくれじと、すばやく歩兵・砲兵・工兵の乗移



譯國十二

却

る自動車群が續く。我が機械化部隊の一せいの追撃である。戦火に打煙る戦場を後に、敗走する敵を全速力でふみにじつて進むのだ。何といふ痛快事であらう。

今、兩軍主力の會戦はたけなはらしい。右方ばかりに、遠雷のやうな砲聲がしきりに聞える。あと百七八十軒で、敵軍主力の背後に出ることが出來よう。其の退路を完全に斷つて、高く日章旗をひるがへすのは、今夜か、明朝か。

第十四 (ほまれの記章)

「ドンく、ドンく。」

(一)

正一君のおとうさんは、せつせと樽たるを作つてゐる。左脚をのばし、右脚でぐつと樽をかへながら、木槌きづちを使つて竹のたがをはめる。あの左脚は義足なのに、まるで何の不自由もなささうに、仕事ははかどつて行く。

「をぢさん、負傷された時は痛かつたでせう。」

だしぬけに僕が聞くと、をぢさんは、

「たまがあたつた時は、痛いとも何とも思はなかつたよ。たゞ何かで、びしやつとぶたれたやうな感

じだつた。」

と言つて、樽を廻しながら、ドンくどたゝいてゐる。をばさんが火鉢を持つて來た。

「今日は、午後から大分冷えますね。痛みませんか。と、やさしく尋ねる。

「ちよつと、うづくやうだがね。なに、此のくらゐ何でもないよ。」

をぢさんの答は、どこか軍人らしいところがある。

「三郎さん、正一はもうちき歸ります。さつき、樽を届けに醬油屋しょうゆさんまで行きました。もう少し待つてゐてやつて下さいね。」

やさしいをばさんは、僕にもかう言つてから、何かとをぢさんの世話や、仕事の手傳を始めた。

「僕、かまひませんよ、をばさん。」

正一君は感心だなあ。僕も何か手傳へたらと思ひながら、なれないのでだまつてゐる。をぢさんの手際に見とれながら、何時の間にか、よく聞かされた戦争談を思ひ浮かべる。

興安嶺^れおろしの吹きすさぶ或寒い日、不意に現れた三千餘りの敵と出合つたをぢさんの大隊は、五六百の小勢でぶつつかつて行つた。ところが、突撃前の大事な時になつて、運悪くをぢさんの輕機關銃が

障

急にきかなくなつた。しまつたと思つて、いきなり「故障」と叫ぶ。ちやうど其の時、隣にあつた分隊長が、「あつ」と言つて倒れた。思はず「分隊長殿」と近づくと、おれにかまふな。早く直して撃つんだ」と言ふ。これが、分隊長の最後の言葉だつた。をぢさんが負傷したのは、其の時であつた。をぢさんは、たゞもう夢中で故障を直した。「タ、タ、タ、タ、タ、タ」と快い音が鳴り出した時の嬉しさ。すると、後の戦友がはひ寄つて、早くほうたいしろ」と押しつけた。始めて氣がついたをぢさんは、血まみれの軍服を切開いて、すぐ止血をし、ほうたいをしたが、それつきりもう立てなかつた。

をぢさんは何時も話の終に、口ぐせのやうに言ふ。「あの時、最後の突撃に参加することが出来なかつたのが、くやしくてならぬ。」さうして、こゝまで来ると、きまつたやうにをぢさんは涙ぐむのである。

突然入口で「たゞ今。」といふ聲がした。正一君が歸つたのである。やがて、其の元氣な姿が仕事場に現れる。

「おとうさん。醬油屋のをぢさんが、よろしくといはれました。寒いから脚を大事になさい。さうして、出来たらいくらでも作つて届けて下さい。」

をぢさんは、にこ／＼しながら言つた。

「さうか。ありがたいことだ。出来るだけ勉強して作らう。御苦勞だつたな。さつきから、三郎さんが来て待つてゐられたんだよ。」

それから一時間ばかり、僕たちは、何も忘れて愉快にまり投をして遊んだ。

(二)

半月程たつて、或日曜日、僕は朝早く運動に出かけた。招魂社の前へ来たので、石段を登つて参拜しようとする、と、神前で今恭しく拜んでゐる人がある。近づきながらよく見ると、正一君親子であつた。

をぢさんは、何時までも頭を下げて拜んでゐる。其の真剣な様子を、僕は立止つてじつと見つめてゐた。

やうやくお参りがすんだと見えて、二人はこつちへやつて来る。僕は元氣よく、

「お早う。」

と言つた。をぢさんは、

「お、三郎さんか。君、こんなに早くお参りとは感心だね。」

「をぢさんこそ、脚がわるいのに大變ぢやありませんか。」

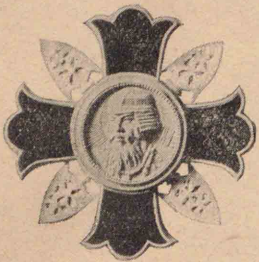
すると、をぢさんは、

「今日は、わたしの上官や戦友の命日なんだ。をぢさんは、不自由ながらもかうして生きてゐる。それが、戦死した人や、遺族の人たちにはすまないやうに思はれてね。おわびかたぐお参りをしたのだよ。」

と言ひながら、もう一度社殿の方を見やつた。

見れば、をぢさんの胸には、軍人傷痕しやういの記章が輝いてゐた。

ほまれの記章だと、僕は思つた。此の記章を付け



た人々に對しては、いくら感謝しても感謝しきれないのだと思つた。

僕もお参りをすまして、三人一しよに歸途についた。

石段を下りる時、正一君も僕も、をぢさんに寄りそつて助けようとすると、をぢさんは、

「ありがたう。ひとりで大丈夫だよ。今日はお参りなので、皇后陛下から賜はつた義足をつけたが、これで土を踏むのは、ほんたうにもつたいたい。ない。ありがたいたいことだ。ありがたいたいことだ。」

と、終はひとり言のやうに言つた。其の聲につり込

賜后

まれて、僕たちも、たゞありがたい感じで一ぱいになつた。

第十五 萬葉集まんえふしふ

今を去る千二百年の昔、東國から徵集されて九州方面の守備に向かつた兵士の一人が、

今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯みたてと出立つわれは

といふ歌をよんである。「今日以後は、一身一家をかへりみることなく、いやしい身ながら、大君の御楯となつて、出發するのである。」といふ意味で、まことによ

悟

く國民の本分、軍人としてのりつばな覺悟をあらはした歌である。かういふ兵士や其の家族たちの歌が萬葉集に多く見えてゐる。

上は天皇の御製を始め奉り、當時の殆どあらゆる身分の人々の作、約四千五百首を二十卷に収めたのが萬葉集である。かく上下を問はず、國民一般が事に觸れ物に感じて歌をよむといふのは、我が國民性の特色といふべきである。

武門の家なる大伴氏、佐伯氏が上代から言傳へて來たのを、大伴家持（やかもち）が長歌の中によみ入れた次の言葉は、今日國民の間にひろく歌はれてゐる。

海行かば水づくかばね、
山行かば草むすかばね、
大君の邊にこそ死なめ、
かへりみはせじ。

「海を進んだならば、水にひたるかばねとならばなれ、山を進んだならば、草の生えるかばねとならばなれ、大君のお側で死なう、一身をかへりみはしない。」といった意味で、まことに雄々しい精神を傳へ、忠勇の心が躍動してゐる。萬葉集の歌には、かうした國民的感激に満ちあふれたものが多い。

有名な歌人、柿本人麿（かきのものひとまろ）や、山部赤人（やまべの）の作も、また萬葉

躍

集によつて傳へられてゐる。

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば
月かたぶきぬ

人麿の歌である。文武天皇がまだ皇子であらせられた頃、大和の安騎野で狩をなさつた。人麿も御供に加つた。野中の一夜は明けて、東には今あけぼのの光が美しく輝き、ふりかへつて西を見れば残月が傾いてゐる。東西の美しさを一首の中によみ入れた、まことに調子の高い歌である。人麿は、特に歌の道にすぐれてゐたので、後世歌聖とたゞへられた。和歌の浦に潮みち來れば瀉をなみあしべをさし

浦

てたづ鳴きわたる

紀伊國へ行幸の御供をした時、赤人が作つた歌である。「和歌の浦に潮が満ちて來て、干瀉がなくなつたので、あしの生ひ茂つてゐる向かふの方をさして、つるが鳴きながら飛んで行く」といふ意味で、ひたくと寄せる潮の靜かな音、鳴きながら飛んで行くつるの羽ばたきまでが聞かれるやうな感じのする歌である。

萬

をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名
は立てずして

山上憶良の作である。憶良は、遣唐使に従つて支那

へ渡つたこともあり、元來學者であるが、人間に對する愛の心に富み、其の方面で特色ある歌を多く残してゐる。此の歌は、いやしくも男子と生まれながら、萬代に傳ふべき名も立てずして空しく死すべきであらうか。といふのであつて、後人をして奮起せしめるものがある。

あをによし奈良の都は咲く花のにはふが如く今さかりなり

東大寺の大佛が出来、インドから高僧が渡海して來た頃の華やかな奈良の都を、眼前に見るやうな氣がする。小野老の歌である。

萬葉集には短歌が多いが、後世の歌集に比べて長歌の多いのが一つの特色をなしてゐる。

大和には群山あれど、

とりよるふ天の香具山、

登り立ち國見をすれば、

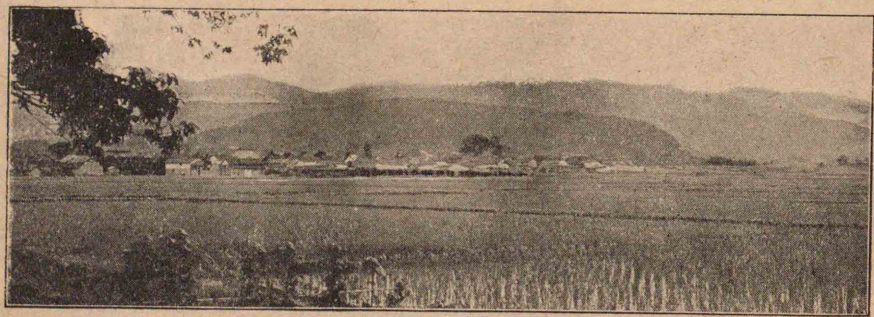
國原はけぶり立ち立つ、

海原はかまめ立ち立つ。

うまし國ぞ、

あきつ島大和の國は。

舒明天皇の御製で、長歌としては短い



華國十二

ものの一つである。大和の國には、多くの山々があるが、中でもそなはり整つた香具山に登つて國の様子を見ると、廣々とした平地には、民家のかまどの煙があちらこちらに立上り、海のやうに廣い池には、かもめがあちらこちらに飛立つてゐる。大和は、りつぱなよい國である。といふのであつて、美しい光景を眼前に見るやうにお歌ひになつてゐる。

以上擧げた歌でも大體わかるやうに、萬葉集の歌は、まことに雄大であり明朗である。それは、要するに我が古代の人々が雄大明朗の氣性を持ち、極めて純な感情に生きてゐたからである。「萬葉」とは「萬世」

純性 ほれど

の意で、萬世までも傳へようとした古人の心を、我々は讀むことが出来る。さうして、かういふ遠い昔に、古事記と共に此の萬葉集を持つてゐることは、我々日本人の誇である。

第十六 奈良

七代七十餘年の帝都として、咲く花のにはふが如しとたへし奈良の都も色移り香失せて年すでに久し。然れども春日の社は、朱の廻廊山の緑に映えて、森嚴自ら人の襟を正さしめ、東大寺の金堂は、天空高く聳えて、五丈三尺の大佛、一千二百年の面影を殘

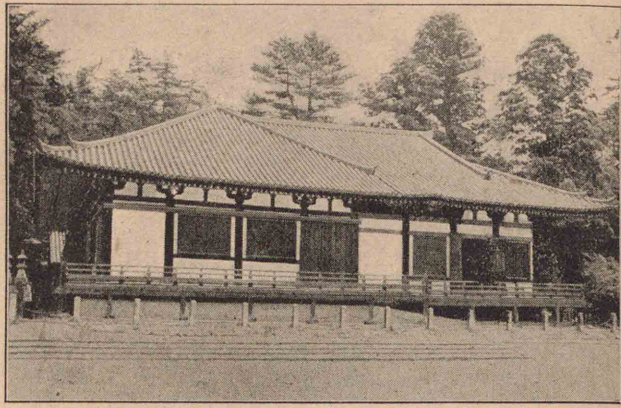
せり。興福寺は伽藍半ばすたれたれど、なほ三重五重の塔、猿澤の池水に影をうつして南都の美觀たり。社寺の壯麗はしばらくおき、何の山、何の川、一木一草に至るまで、歴史あり古歌あり、人をして低回去る能はざらしむ。

春は若草山の芝緑にもえたち、三月堂・二月堂かすみにつままれてさながら夢の如く、秋は春日の社神さび、手向山の紅葉夕日に映ゆる様殊に見どころ



尋常十二

岡 缺 哀

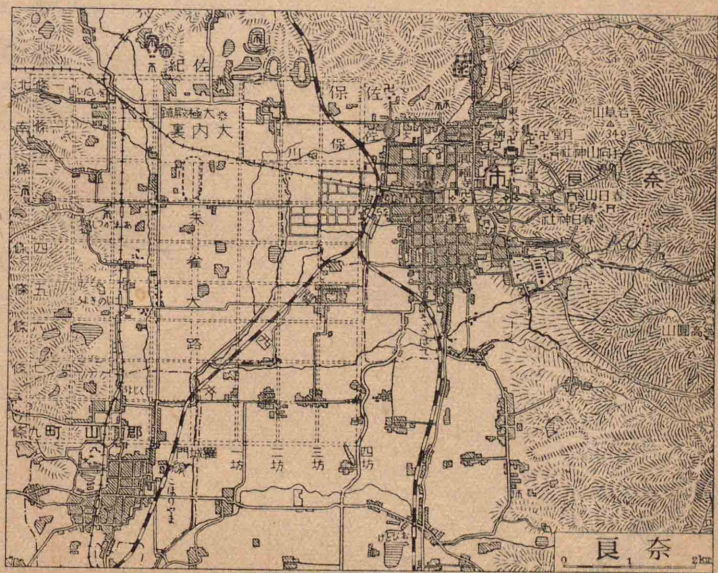


あり。人なつかしげに寄り来る鹿の、春はわけてもやさしく、秋より冬にかけて哀音しきりに人の眠をさますも、奈良には缺くべからざる風情なるべし。

佐保・佐紀の連岡に北を限り、春日・高圓の山々を東に、矢田山・生駒山を西にひかへて、東西四十町、南北四十五町、街路井然として、北に大内裏の宮殿を仰ぎ、朱雀の大路南に走りて、南端に羅城門をふまへたる古の奈良の都は、如何に美しく、如何に盛なりしぞ。

名残

今、若草山に登りて古京の跡を展望すれば、眼下に横たはる奈良市街の西、遠く連なる田園の間に東西に走る三筋の路は、北より數へて古の一條・二條・三條の大路の名残とす。大極殿の跡はるかに指點すべく、南の方郡山（こほりやま）の町の東に、羅城門の跡今も残れりといふ。そのかみ、大宮人の梅をかざし紅葉をかざして往き來しけん都大路、今に



奈良圖

回首

して思へばたゞ一場の夢に過ぎず。更に首を回らして南を望めば、大和平野の盡くる所はるかに畝傍山（うねび）耳成山（み、なし）香久山（かぐ）の三山まゆずみの如く、其の南に、一きは高く多武峯（たふのみね）吉野の山々連なるを見る。愛すべく美しき山野は、太古以來の歴史と結び文學と結びて、感（あ）い（は）よ（く）深（し）。

第十七 修行者と羅刹

「色はにほへど散りぬるを、
我が世たれぞ常ならむ。」
どこからか聞えて來る尊い言葉。美しい聲。

所は雪山せつせんの山の中である。長い間の難行苦行に、身も心も疲れきつた一人の修行者が、ふと此の言葉に耳を傾けた。

言知れぬ喜びが、彼の胸に湧上つて来た。病人が良薬を得、渴者かつが清冷な水を得たのにも増して大きな喜びであつた。

渴

「今のは佛の御聲でなかつたらうか。」

と、彼は考へた。しかし、花は咲いても忽ち散り、人は生まれてもやがて死ぬ。無常は生ある者のまぬかれな運命である。といふ意味の今の言葉だけでは、まだ十分でない。若しあれが佛の御言葉であれば、

其の後に何か續く言葉がなくてはならない。彼には、さういふ風に思はれて来た。

修行者は、座を立つてあたりを見廻したが、佛の御姿も人影もない。たゞ、ふとそば近く、恐しいあまくま悪魔の姿をした羅刹のあるのに氣がついた。

「此の羅刹の聲であつたらうか。」

さう思ひながら、修行者は、じつと其の物すごい形相を見つめた。

「まさか、此の無知じやけんな羅刹の言葉とは思へない。」

と、一度は否定してみたが、

「いや、彼とても昔の御佛に教を聞かなかつたとは限らない。よし、相手は羅刹にもせよ、悪魔にもせよ、佛の御言葉とあれば聞かねばならぬ。」
修行者はかう考へて、靜かに羅刹に問ひかけた。

「一體、お前は誰に今の言葉を教へられたのか。思ふに佛の御言葉であらう。それも前半分で、まだ後の半分があるに違ひない。前半分を聞いてさへ私は喜びにたへないが、どうか残りを聞かせて、私に悟を開かせてくれ。」

すると、羅刹はとぼけたやうに、

「わしは、何も知りませんよ、行者さん。わしは腹が

悟

へつてをります。あんまりへつたので、ついうは言が出たかも知れないが、わしには何も覚えがないのです。」

と答へた。

修行者は、一そうけんそんな心で言つた。

「私はお前の弟子にならう。終生の弟子にならう。どうか残りを教へて頂きたい。」

羅刹は首を振つた。

「だめだ、行者さん。お前は自分のことばつかり考へて、人の腹のへつてあることを考へてくれない。」
「一體、お前は何をたべるのか。」

「びつくりしちやいけませんよ。わしのたべ物といふのはね、行者さん、人間の生肉、それからのみ物といふのが人間の生き血さ。」

と言ふそばから、さも食ひしんばうらしく、羅刹は舌なめずりをした。

しかし、修行者は少しも驚かなかつた。

「よろしい。あの言葉の残りを聞かう。さうしたら、私の體をお前にやつてもよい。」

「えつ。 たつた二文句ですよ。二文句と、行者さんの體と取りかへてもよいといふのですかい。」

修行者は、どこまでも真劍であつた。

謹

「どうせ死ぬべき此の體を捨てて、永久の命を得ようといふのだ。何で此の身が惜しからう。」

かう言ひながら、彼は其の身に着けてある鹿の皮を取つて、それを地上に敷いた。

「さあ、これへおすわり下さい。謹んで佛の御言葉を承りませう。」

羅刹は座に着いて、おもむろに口を開いた。あの恐しい形相から、どうしてこんな聲が出るかと思はれる程美しい聲である。

「有爲の奥山今日越えて、
浅き夢見じ、酔ひもせず。」

酔

と歌ふやうに言終ると、

「たつたこれだけです。がね、行者さん。でも、お約束だから、そろそろごちそうになりませうかな。」

と言つて、ぎよろりと目を光らせた。

修行者は、うつとりとして此の言葉を聞き、それをくりかへし口に唱へた。すると、

「生死を超越てうまつしてしまへば、もう浅はかな夢も迷もない。そこにほんたうの悟の境地がある。」

といふ深い意味が、彼にはつきりと浮かんだ。心は喜びで一ぱいになつた。

此の喜びをあまねく世に分つて、人間を救はねば

食

ならぬと、彼は氣づいた。彼は、あたりの石といはず、木の幹といはず、今の言葉を書きつけた。

色にはほへど散りぬるを、

我が世たれぞ常ならむ。

有爲の奥山今日越えて、

浅き夢見じ、酔ひもせず。

書終ると、彼は手近にある木に登つた。其のてつぺんから身を投じて、今や羅刹の餌食にならうといふのである。

木は枝や葉を震はせながら、修行者の心に感動するかのやうに見えた。修行者は、



りと樹上から飛んだ。

とたんに妙なる樂の音が起つて、朗かに天上に響き渡つた。と見れば、あの恐しい羅刹は、忽ち端嚴な帝釋天の姿となつて、修行者を空中に捧げ、さうして恭しく地上に安置した。諸の尊者、多くの天人た

「一言半句の教のため
に、此の身を捨てる我
を見よ。」
と高らかに言つて、ひら



妙

禮

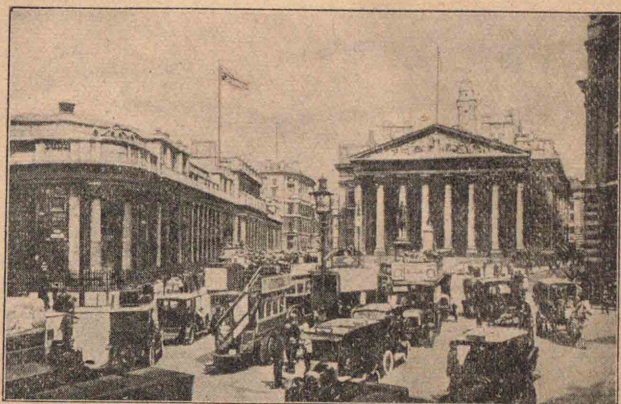
ちが現れて、修行者の足下にひれ伏しながら、心から禮拜した。

此の修行者こそ、たゞ一すぢに道を求めて止まなかつたありし日のお釋迦様であつた。

第十八 歐洲めぐり

ロンドン

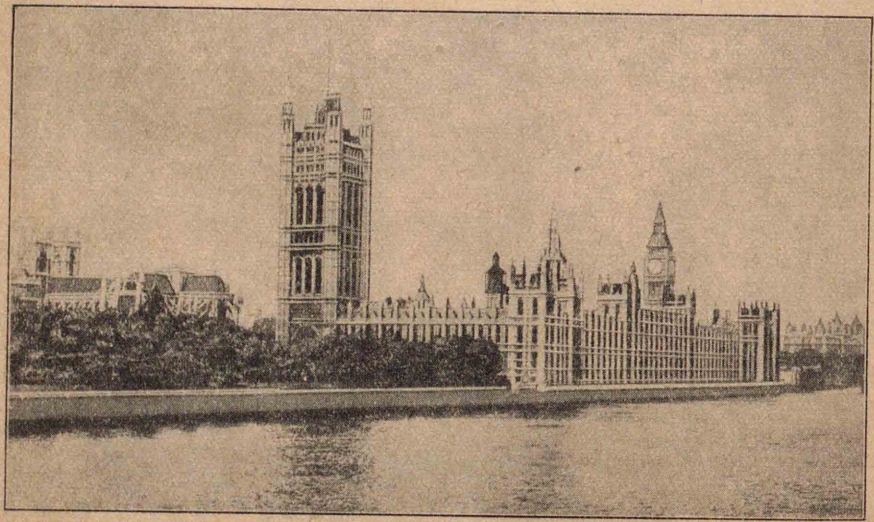
街路が曲りくねつてある。網の目のやうに入りこんでゐる。其の間を、がつしりした二階附の乗合自動車^{自動車}が、押すな押すなでつめかける。狭い歩道は人もあふれさう。ロンドンの心臓といふシチーの



街上は、全く目まぐるしい程だ。中でも、市長公邸と、取引所と、イギリス銀行とが取圍む廣場は、ロンドン第一の交通の難所であらう。此の廣場を中心として、すこぶる不規則に射出する七つの街路を、人の波、車の波が刻々と押寄せる。車は如何にして此の群衆を切抜けて進むかを氣づかひ、人は又、如何にして此のおびたゞしい車の流を横ぎるかを考へねばならぬ。全く息づまるやうな光景である。それでゐて、交通整

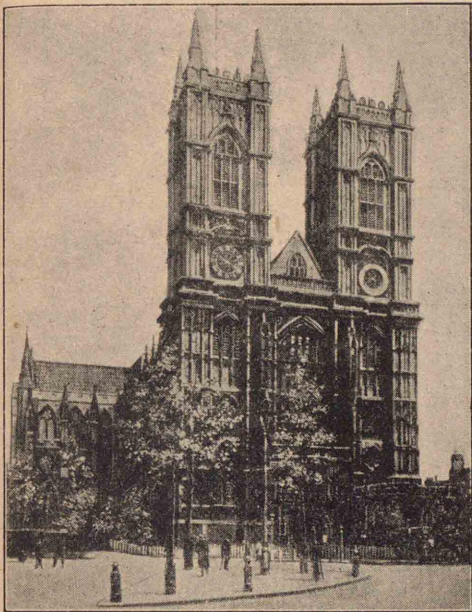
理がうまく行くのにつくづくと感心させられる。

ロンドンには、大英博物館を始め、大きな博物館や美術館があつて、其の一つの見物にさへ一日や二日はかかり、殆ど足が棒になるのを感じる。しかし、其の豊富な歴史的遺物、世界的名作標本、模型等の陳列によつて、我々は世界の歴史、イギリスの歴史、口



ンドンの歴史、歐洲の繪畫史、イギリスの繪畫史などを、さながらに知ることが出来るのである。

テムス河のほとりに堂々たる國會議事堂があり、其の近くにウエストミンスター寺院がある。建物の偉觀は前者にあらうが、歴史ゆかしいのは後者



である。そこには、イギリスが生んだ光榮ある政治家、學者、詩人、文學者、發明家等の墓が、一步一步に存在し、彼等を記念する美術的な彫像が壁

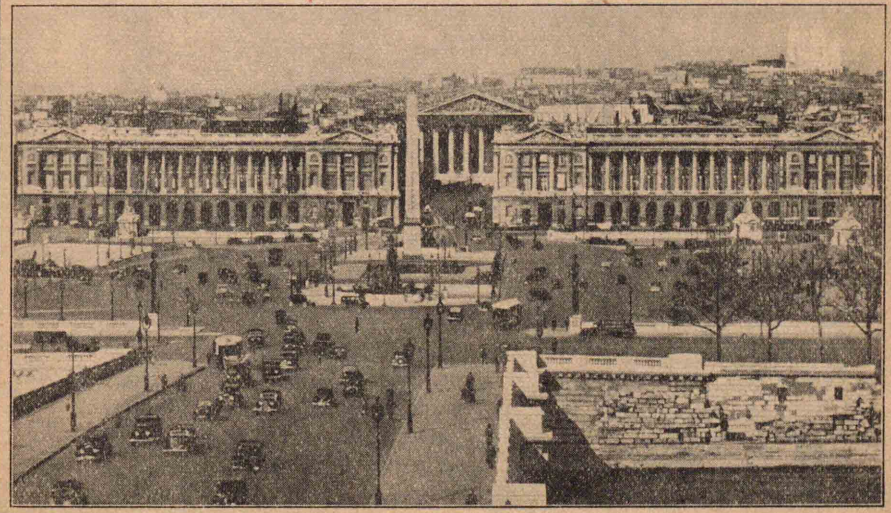
彫

面に沿うて並んである。

町といふ町は、雑沓してあるが、しかしロンドンには大小の公園が多く、至る所に田園的な自然をくりひろげてある。方數軒の大公園には、いと、我々は無限の自然の中をさまよふ氣がする。芝生を傳ひ木の下道を傳ひ、池のほとりをたどりながら、數時間歩いて、公園の端を見ないことがある。さうして、これだけの數と、これだけの廣さがあればこそ、よし日曜日の午後であつても、公園はいうくたる自然の趣を失はぬ。大公園の奥へは、いと、人影を見ない自然郷をさへ探し出すことが出来るのである。

パリ

パリに來て嬉しいのは、すつきりした街路である。此の街路を、數層の優美な高樓が、すべて白色のよそほひを以て飾つてゐる。自動車で走ると、幾千幾萬とも知らぬ美しい窓が、我々の心をそる。時々大通は、川じりが三角洲をはさんで分れるやうに、銳角に分岐し、其の分岐

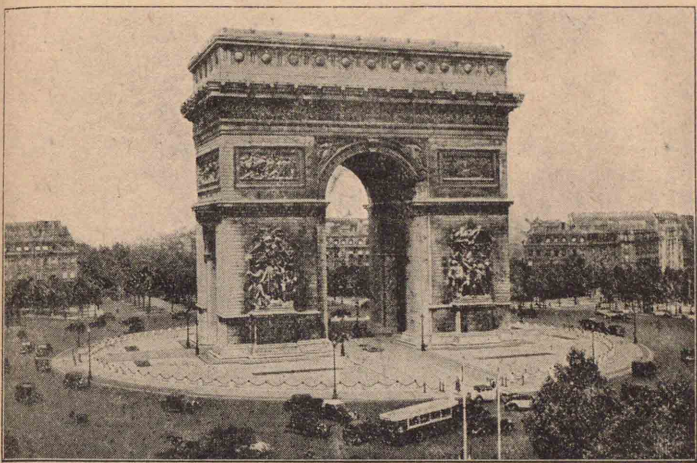


疾驅

點に立つ高樓が一きは優麗に仰がれる。又、並木の美しい大通を真直に走ると、其の一端に噴水や花壇のある廣場があり、廣場を中心にして大通が五方六方へ放射する。

なかんづくコンコルドの廣場から、シャンゼリゼーの大通を過ぎて、ナポレオンの凱旋門がせんに至る美觀は、何といつても世界一の名に恥ぢない。此の凱旋門を中心に、十二方へ射出する街路を、氣早なパリ子を乗せた幾十臺幾百臺の自動車が、後から後から疾驅する。十二方から凱旋門の廣場に集つて、十二方に散つて行くのが、花に飛びちがふ蜜蜂みつばちの群を思

はせる。見るからに、胸がすくやうな氣がする。



都市の美觀を誇るパリーは、又藝術の都として知られてゐる。昔の王宮であつたルーブルは、今博物館と美術館になつてゐるが、其の美術館をごくざつと見るにさへ、少くとも二日や三日はかゝらう。フランスはもとより、歐洲繪畫の名作が室から室へぎつしりと並んでゐる。此の外、ルクサンプール美術館にも美術の粹

覽

が見られる。春は有名な美術展覽會が開かれ、冬の夜は歌劇劇場の窓が紅紫の電燈にほつて、都人の心をそゝる。あらゆる流行のさきがけをするのも、またパリーだといはれてゐる。

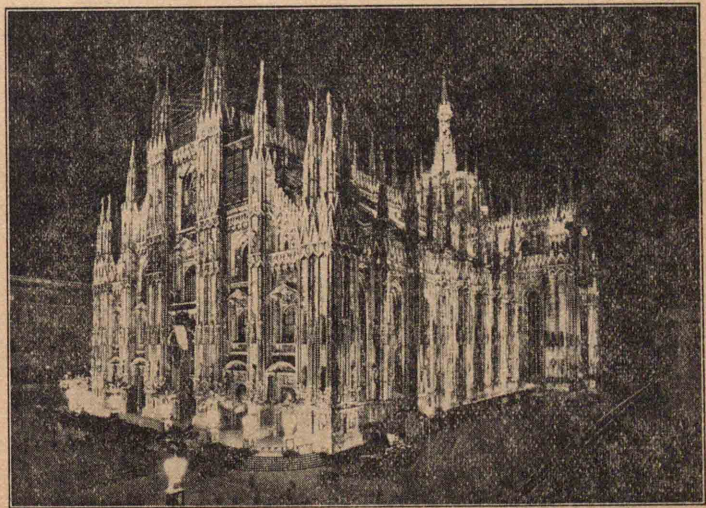
イタリアをめぐりて

イタリアを旅行してゐると、どこか日本に似たところがある。山川海平原が適當に入りまじつて、至る所に日本的な風景を點出する。特に空と海とが朗かである。

其の上、京都奈良をしのぶやうな古都が多く、それらがすべて古美術を以て満たされてゐる。ミラン

跡

の大寺院の屋上に、白大理石の尖塔^{せんたふ}九十八本を仰ぎ見るすばらしき。ゼノアにはコロンブスの家がある。ローマには世界第一の大伽藍^{がらん}といふセントピーター寺院や、ローマ法王のバチカン宮殿があり、昔のローマの遺跡がある。好風景を以てたゞへられるナポリは、我が鹿兒島市^{かごしま}の景色に似通つたところさへあつた。



例 由 主 弊 疲



だが、今のイタリヤは新興の意氣にもえてゐる。ミラン・ローマ・ナポリは、古都としてよりも、現代都市として最近の活動にめざましいものがある。ロンバルヂヤ平原には、もう農村疲弊の聲がなといふ。主な停車場には、黒シヤツの青年が見はりをして、旅人の安全をはかつてゐる。由來名所には、すりや^{こしき}や^{じき}食が多い。イタリヤもかつては其の例にもれな

かつたが、今は殆ど其の跡を絶つてしまつた。國民すべてが緊張きんちやうしたのである。

フロレンスにイタリアの古美術をたづねてから、ベニスへ向かはうとする汽車中のことであつた。もう餘程目的地へ近くなつた頃、或驛で停車すると、どや／＼と此の國の青年が四五人はいつて来て、私のそばに腰をかけた。しきりに「ジャポネーゼ、ジャポネーゼ」とさゝやくのが聞える。イタリア語を知らぬ私にも、それが「日本人」といふ意味だと見當はつく。すると、一人の青年が私の前に立つて、

「あなたは日本の方ですか。」

ど、はつきり日本語で言つた。今、各國で日本語の研究が盛であることは聞いてゐたが、ヨーロッパに来て、外國人に日本語で話しかけられたのはこれが始めてである。

「さうです。」

「私は、日本語を二年程勉強してゐます。」

かなり正しい發音である。他の青年たちは、にこにこしながら、半ば不思議さうに、私とかの青年の顔を見くらべてゐた。

彼はなほ、私が日本語を勉強してゐるものだから、友人たちが、此の日本人と話をして見よと言つたの

です。といふやうな意味のことを述べた。かう込入つたことになる、言葉はしどろもどろである。しかし、私は何とも言へぬ嬉しさを感じて、彼の手を握つた。

「あなたは、日本語が上手です。もつと勉強なさい。さうして、あなたの友人にも、日本語を教へてあげなさい。」

青年も、嬉しさうににこ〜笑つてゐた。

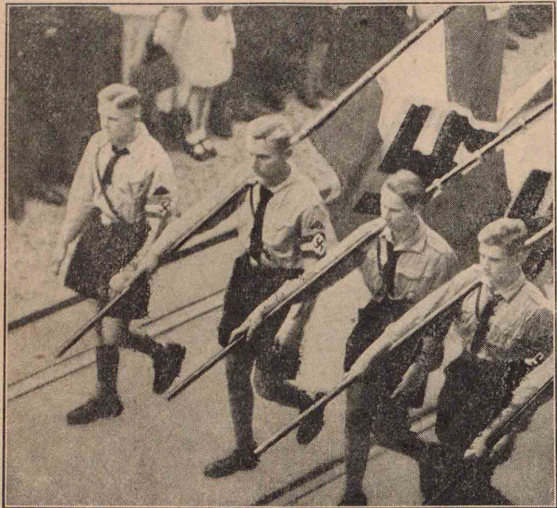
窓外には、何時の間にかベニスが近づいてゐた。今渡りつゝある長橋によつてのみ、ベニスは陸と續いてゐる。さうして、彼方には、おとぎ話の國の都を

思はせるやうな圓屋根や尖塔の聳える水の都が浮かんで見えるのであつた。

ベルリン

新興の意氣は、ベルリンに来て更にすばらしいものがあるのを見た。

道行く人は、男も女も緊張し切つてゐる。きちんとした服装が先づそれを物語る。胸を張り、元氣よく歩く彼等の姿勢がそれを物語る。かぎ十字の腕章を付け、如



腕

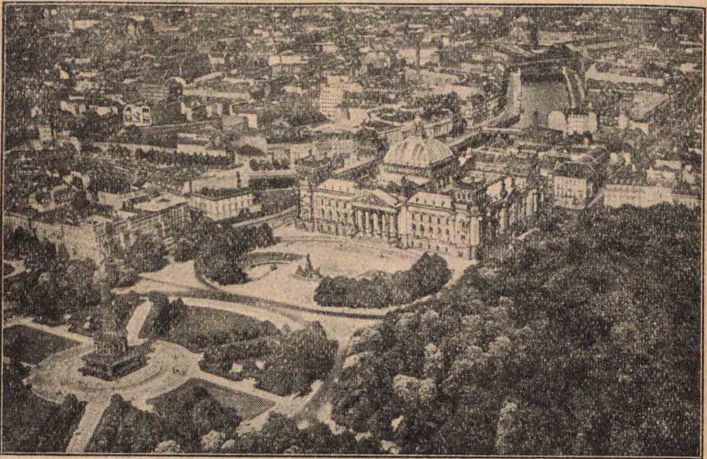
何にもきりつとした揃ひの服装で、ヒトラー青少年團がねり歩く。

街路はきれいに洗ひ清められ、殆ど紙くづ一つ落ちてゐない。美の都市パリでさへ、時に散らばつた紙くづを見たが、ドイツ人はどこまでもきれいきでである。

國際飛行の中心都市として、ベルリンには三分毎に旅客機が發着する。更にベルリンを中心に、國內に四通八達の自動車道路が開かれ、自動車がすばらしい勢で疾走する。

市内に住む家族たちは、日曜日に多く郊外に出か

か



ける。もちろん散歩を目的とする者もあるが、彼等の中には、郊外に幾らかの耕地を持ち、父も、母も、子供たちも、一日それを耕すことを楽しむとしてゐるのが多い。近來はそれだけで満足せず、住宅を郊外の森林地帯などに營むことが流行して來た。近代科學を家庭生活に應用することに力める彼等が、一面には大地を慕ひ、森林を慕つて止まぬのである。

かうしたドイツ人が我々日本人にはしばく好意を見せてくれる。

或夜、私は町のとある食堂にはいつた。席は殆ど満員である。すると、向かふの食卓しょくたくにすわつてゐた夫婦の客が、手をあげて私をさし招いた。其の食卓に空席があつたのである。私は心から「ありがとう。」と言ひながら席についた。

折から、快い音楽が堂内に流れてゐる。私は、運ばれて来た食事を取りながら、聞くともなしに聞入つてゐた。

しばらくして奏樂がやんだ。すると、樂長がつか

つかと私のそばへ來た。さうして、

「あなたのために、日本の曲をやりませう。」

とあいさつした。私は、胸がときめくのを覺えた。さうして、何の曲をやるのかと、ひたすら心に待ちかまへた。

やがて曲は始つた。靜かな旋律せんりつである。

「荒城の月」が、満堂を壓してゆるやかに流れ始めたのであつた。

第十九 リヤ王

(一)

齡

リヤ王は、三人の娘、娘のむこ、重臣などを面前に呼んで言渡す。

リヤ王「予も大分高齡になつたによつて、以來めんだうな政治の事は若い者たちに任せ、身輕になつて老後を送りたいと思ふ。そこで、今日は、我が王國を三分して、三人の娘たちに與へることとする。
(臣下に)地圖を持て。

惠

さて、娘ども。そなたたちの中で、誰が一番此のわしを大事に思つてくれるか、それを、そなたたちの口から聞きたい。其の上で、一番孝行の心ある者に、最大の恩惠を與へるであらう。先づ、姉のゴナ

リルから申せ。

ゴナリル「父上、私は口で申すことの出来ず以上に、父上を尊敬も致し、おいとしくも思ひます。此の世の中にある何よりも、どんな尊い寶よりも、いや、私自身の命よりも、父上を大切と存じます。此の世に生まれたどんな孝行の子にもまして、眞心を父上に捧げます。

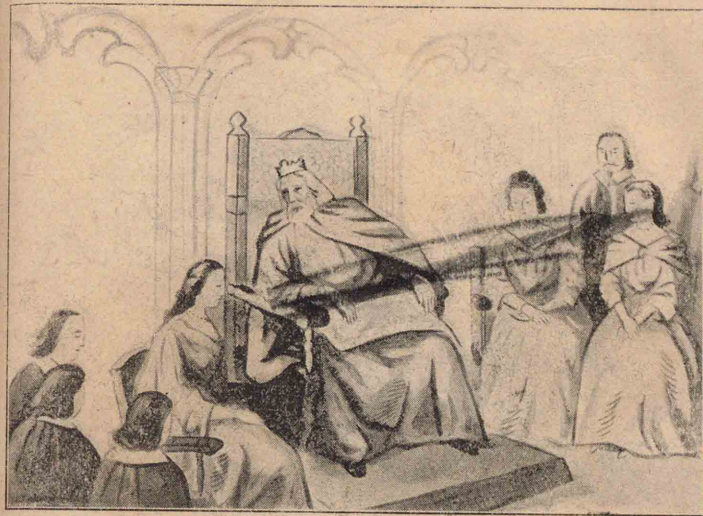
域

リヤ王「うむ。(地圖を指して)では、此の線から此の線までを、そなたに與へる。茂つた森林、豊かな平野、魚に富む川、廣い牧場のある此の境域の領主と、そなたをするのだ。さて、二番娘のリガンは。

リガン「私の心持は、姉上と全く同じでございます。姉上は、私の思つてゐる通りをおつしやいました。

たゞほんの少しおつしやり足らぬところが違ひますだけで。私は、あらゆる幸福、一切の樂しみを犠牲ぎせにしまして、父上お一人にお仕へ申すのを仕合せと存じます。

リヤ王「では、これがそなたの領地ぢや。廣さにおいて



劣値

も、値うちにおいても、決して姉のに劣りはせぬぞ。さあ、いとしい末のコーデリヤは何とだ。

コーデリヤ「あゝ、何と申し上げたものか。口先だけで實行の伴はない事は、私には申し上げられない。父上、私にはなんにも申し上げることがございませぬ。

リヤ王「なんにも。

コーデリヤ「はい。

リヤ王「なんにもない所からは、なんにも生まれぬぞ。改めて申せ。

コーデリヤ「私は、此の心にあることを口に出して言へ

ないのでございます。私はあなたを父上として大切に致すつもりでございます。

リヤ王「ゴードリヤ、言方をつくるはぬと、身のためにならぬぞ。

ゴードリヤ「父上のお言附を守ります。子としての勤も致します。

リヤ王「あいきやうのない言葉ぢや。 たつたそれだけか。

ゴードリヤ「……………」

リヤ王「それは本心で言ふのか。

ゴードリヤ「はい。 眞實でございます。 眞實より外に、

私は何もございませぬ。

リヤ王「勝手にしろ。 其の眞實だけを持參金にして、どこへでも嫁入るがよい。 残りの三分の一は、改めて長女と次女とにわけ與へる。

重臣「あ、もうし、それはあんまりではございませぬか。 リヤ王「弓は引きしぼつてある。 矢先を避ける。

重臣「私は謹んで申し上げます。 末姫様は、決して御不孝なお方ではございませぬ。 若し私の此の判断があやまつてをりますなら、どうぞ私の首をお召し下さいませ。

リヤ王「いや、くどい、くどい。 もう言ふな。 さて、かう

断 判 避

許

領地を二分して二人の娘に與へるからには、予は今後百人だけの家來をつれ、月代りに姉娘・妹娘の許へ參つて、餘生を送ることにする。フランス王に大王、末娘とのかねての婚約、あなたはそれをお果しになるおつもりか。御覽の通り、一切持參金なしの乞食同然、如何やうになされようと、あなた次第でござるが――。

フランス王「私は持參金と婚約は致しませぬ。コーデリヤどのの尊い眞實を實に、どこまでも后と致します。

リヤ王「よいやうになされ。娘は勘當でござるぞ。

后

フランス王「承知致しました。

(二)

リヤ王「家來たちと狩から歸る。ゴナリルの召使に、リヤ王「少しも待てぬ。早速食事の支度をしろと言へ。いや、もうすつかり疲れた。食事だ、食事だ。

ゴナリル、むづかしさうな顔をして出て来る。

額 どうしたのだ、娘。なぜ額にハの字を作つてゐる。近頃は、むづかしい顔ばかり見せるなう。

ゴナリル「どうも、無作法千萬なお附の家來たちが、しよつちゆうの、しり合つて、私の宅はまるではたご屋同然でございます。それも、きつと父上に取り

額

しまつて頂かうと存じますのに、どうやら父上がしり押をなすつていらつしやるやうに思はれてなりません。若しさうと致しますと、家のため國のため、私が取りしまりをする事になりました。自然父上のごきげんを損ねるやうなことになるかと存じます。

リヤ王「それで、お前さんはわしの娘か。」

ゴナリル「もし、そんな皮肉はごめんをかうむります。父上は御高齢でいらつしやるから、御賢明でなくてはなりません。父上、さつきも申しました通り、毎朝毎晩、お附の百人の大騒ぎ、これには私もほと

賢皮 損

閉

ほと閉口致します。今日限り五十人にへらすことに、御同意を願ひます。

リヤ王「おのれ、よくも申したな。予の馬に鞍くらを置け。家来ども、集れ。道知らずの恩知らずめ。もう厄介にならぬわい。わしには、まだもう一人の娘がある。あゝ、あゝ、後悔先に立たず、飼犬に手をかまれた方がまだましぢや。

(三三)

リガンの家の門前で、召使に、
リヤ王「なに、御病氣でお目にかゝれぬと。病氣なら、

悔 介

父が病床へお見舞申すと言へ。

リガン出て来る。

お、来た。さうあるべきぢや。娘よ、姉めはひどい女ぢやぞ。不孝者の爪で、わしの心をかきむしりをつた。

リガン「父上、あなたには、姉上の真心がよくおわかりにならないのだと存じます。

リヤ王「なんと。

リガン「私には、姉上が少しでもお勤をお怠りにならうとは思はれませぬ。あなたのお附の者の亂暴に對して、或はお小言が出たかも知れませぬが。

照

リヤ王「わしの家來を五十人にへらしをつた。

リガン「五十人で結構ぢやございませぬか。おとなしく、姉上の所へお歸りあそばせ。

リヤ王「いや歸らぬ。決して歸らぬ。今日から、そなたの所で世話にならう。

リガン「私の所では、五十人の半分の二十五人にして頂きたうございます。それに、姉上の所へいらつしやつてからやつと二週間、私の方には、まだお迎へ申す準備がしてございませぬ。

リヤ王「これや、不孝者のうは手ぢや。お、神々も御照覽あれ。年も積り、悲しみも積つて、見るかげも

なくなつた此の老いの果を。おのれ、不孝者め。今に世界中がひつくり返らないでゐるものか。

外は次第に暴風雷雨。

出て行かう。あらしだ。あらしよ、吹け。雨よ、瀧つ瀬と降れ。雷よ、天地をつんぎけ。

(四)

里ヤ王が姉たちにぎやく待されてゐることを探知したコーデリヤは、フランス王に従ひ、老父王のために軍勢を率ゐて英國に渡つた。ひどいあらしの翌朝、發狂した老人が荒野にさまよつてゐるのをフランス兵が發見して陣所に伴ひ、侍醫が手を盡くして介抱する。それが里ヤ王であつた。

雷 探 狂 抱

侍醫「いかが致しませう。お起し申しませうか。もう大分長くお休みになつてをります。

コーデリヤ「萬事おためによいやうに取りはからつておくれ。

王に近寄つて、寢顔を眺め、

お、おどう様。私の方、侍醫の方、ありとあらゆる藥物の方で、姉上たちからお受けになつたお心の痛みが、すっかり取れますやうに。たとへ、あなたがおどう様でないにもせよ、此の白い髪やおひげを見ては、お氣の毒だと思はねばならないはずだのに。まあ、此のお顔を荒狂ふあのあらしにおさ

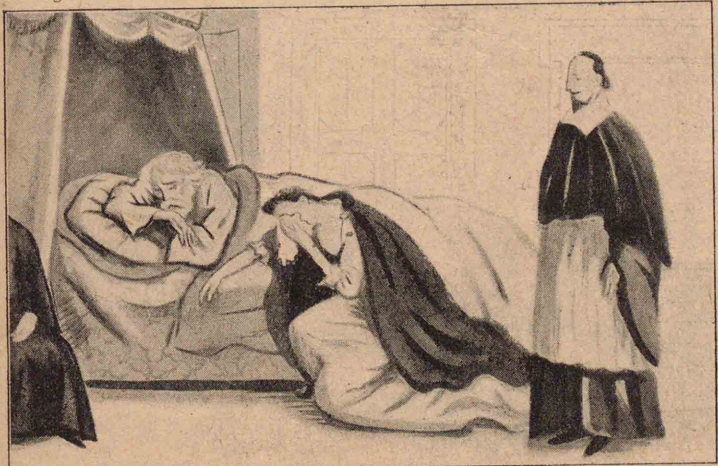
らしになつたとは。あのはためく雷に、すさまじい雨に。

リヤ王、目を開く。

リヤ王「墓場から、わしを連出すとはあんまりぢや。はて、あなたは、天人ぢやな。」

コーデリヤ「私を御存じございませぬか。」

リヤ王「かうつと。わしは、今までどこにゐたのかな。ここはどこぢや。や、日がさす。」



幸國十二

手をつねると痛い。

コーデリヤ「私を、ようく御覽下さいませ。」

リヤ王「どうか、なぶつて下さるな。わしは、ばかなたはけた老人でござる。はて、お前さんは、どうやら見覚えのある方のやうだが、はつきりせぬ。笑つて下さるな、どうもわしの末娘コーデリヤのやうに思へてならぬ。」

コーデリヤ「其のコーデリヤでございます。コーデリヤでございます。」

リヤ王「涙を流して泣いて下さるのか。お、涙ぢや。お前さんは、わしをうらんでゐるはずだが。」

コーデリヤ「なんでうらむわけがございませう。なん
でうらむわけがございませう。

リヤ王「わしはフランスへ来てゐるのか。

侍醫「いや、御本國にいらせられます。

リヤ王「えい、だますな。

コーデリヤ「まだお心の亂れがお直りになつてゐない。

と歎息する。

思

侍醫「其の點はお心強く思し召しあそばしませ。激
しい御亂心は、もうをさまりました。お后様には、
奥へいらつしやつて、しばらくお會ひにならぬ方
がよろしうございます。こゝ二三日で、きつと御

裁

本復になりますから。

第二十 裁判

借 律 證 據 請 求

貸した金を返せと言つて、甲がさいそくする。そ
れに對して、借りた覚えはないとか、もう返したはず
だとか、乙が主張する。かういふ法律上の争があつ
た場合に、裁判所は、甲即ち原告の訴うったへを受付け、乙即ち
被告をも呼出して、兩方の言分を聞いたり、證人や證
據の書附を調べたりした上で、どちらの主張が正し
いかを判断し、金を返せとか、返金を請求するわけに
は行かないとか、言渡す。此のやうに、人々相互の訴そ

犯 辯 刑

訟をさばくのが民事裁判である。

又、例へば甲の持つてゐる家が焼けたとする。さうして、それがどうも放火らしく思はれ、乙が其の犯人ではなからうかといふ疑のある場合に、公益を代表する役人たる検事が裁判所に訴を起し、裁判所は、検事の主張と、被告人たる乙の辯解とを聞き、證人其の他の證據を取調べた上で、或は有罪の判決を下して刑を言渡し、或は無罪の判決をする。かういふのが刑事裁判である。

裁判は、要するに國法の規定を實際問題に當てはめることである。例へば、民法に「故意又ハ過失ニ因

爲

リテ他人ノ權利ヲ侵害シタル者ハ、之ニ因リテ生ジタル損害ヲ賠償スル責ニ任ズ」と規定してあるが、實際の事件に當つては、ほんたうにさうした不法行爲があつたかどうか、若しあつたとすれば、どのくらいゐの損害賠償をさせるのが適當であるかを判断せねばならぬ。又、例へば刑法に「人ヲ殺シタル者ハ、死刑又ハ無期若クハ三年以上ノ懲役ニ處ス」といふ規定があるが、今問題になつてゐる人が、ほんたうに殺人事件の犯人であるかどうか、ほんたうに犯人であるとしたら、どの程度の刑を當てるのが適當であるかを決定せねばならぬ。其の判断決定が裁判であつ

趣旨

て、國法の趣旨は、これによつて實現されるのである。

裁判は、裁判所で判事が行

ふ。裁判所には、區裁判所、地

方裁判所、控訴院、大審院の四

階級があつて、區裁判所は一

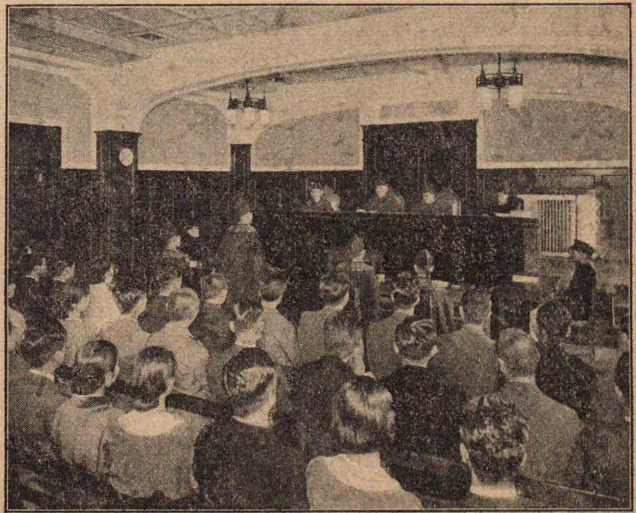
人の判事、地方裁判所、控訴院

はそれぞれ、三人の判事、大審

院は五人の判事で組織される。裁判は、事件の輕重

によつて、最初區裁判所又は地方裁判所で行はれる

が、此の第一審の裁判に不服な者は、地方裁判所又は



組織

區

控訴院に控訴し、其の裁判になほ不服な者は、もう一度大審院に上告することが出来る。かういふふうになつて、二回まで上訴し得るやうになつてゐるのは、つまり裁判を念入りにするためである。さうして、刑事裁判では、検事が立會ひ、又人民中から選定された十二人の陪審員が事實の判斷にあづかる場合がある。又、辯護士といふものがあつて、民事裁判では、原告被告の附添人又は代理人として、其の主張を助け、刑事裁判では、被告人のために辯論する。

裁判について誰でも心得ておくべきことは、民事裁判では、裁判できめられたことに服従することである。

廷 罰

あり、刑事裁判では、有罪の判決が確定する前に、みだりに人を犯罪者扱ひにせぬことである。又、陪審員になつた場合には、それを國民の義務として忠實に勤めること、證人として法廷に出た場合には、良心に従つて眞實を述べることなどは非常に大切なことである。

裁判の目的は、決して人を争はせたり、人を罰したりすることではない。此の世を不道理や罪惡の行はれない、平和な秩序正しいものにする事が其の目的である。若し裁判がなかつたとしたら、人々相互の争が果しなく行はれて、力の強い者が勝ち、わる

維

がしこい者がまぬかれることになるであらう。若し又、裁判が公平に行はれぬとしたら、せつかくの國法も價値を失ひ、我々は安心して生活することが出来なうであらう。裁判は實に、正義を保護し、秩序を維持するための大事な仕事だといはねばならぬ。

第二十一 雪残る頂

早春

正岡子規

雪残る頂一つ國ざかひ
菜の花や小學校のひるげ時
柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

犬が来て水のお音の夜寒かな

鳴雪めいせつ

夕月や納屋なやもうまやも梅の影。

一 中 矢車に朝風強きのぼりかな

夏山の太木倒すこだまかな

第二十二 太陽

否

私たちが人類にとつて、否、すべての生物にとつて、太陽ほどありがたいものがあるだらうか。

太陽は、私たちに絶えず熱と光を送つてよこす。地上のあらゆる生物は、此の熱、此の光のおかげに生

凡

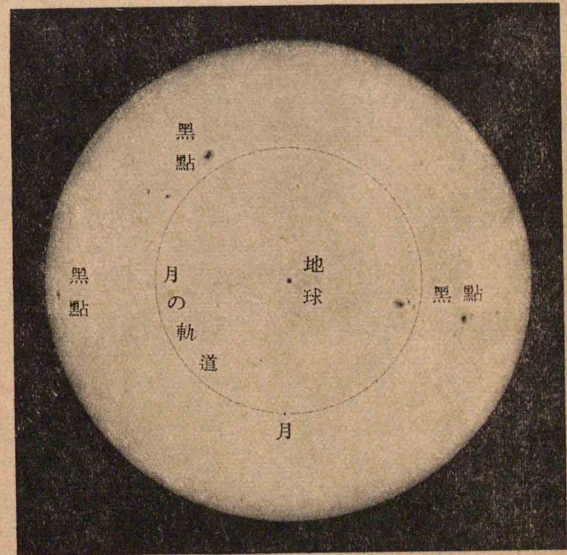
きてゐるのである。月は死の世界であるといふことを、私たちはすでに知つた。太陽こそは、あらゆる生命の源泉なのである。

あらゆる生命の源泉であるだけに、それは又實に偉大な存在である。直徑凡そ百四十萬軒もある一大火球だといふ。もちろん、かう言つただけでは殆ど見當がつかない。月は、地球を中心として、ぐるぐる廻つてゐる。今かりに其のまま、そつくり移して、地球を太陽の中心に置くとしても、月は太陽の内部を廻るだけである。地球と月との距離が今の約二倍なくては、月が太陽の表面を廻るわけにはいかな

球

い。又、月を直徑三糎のピンポンの球、地球を十二糎のゴムまりとして見ても、太陽は直徑十三米といふ大きなものになつて、ちよつと手近にたとへるものが見つかからない。

此の大きな太陽が、私たちの住む地球から見ると、大體月と同じ大きさに見えるのは、いふまでもなく、太陽が月より非常に遠い所にあるからである。地球から太陽への距離は凡そ一億五千萬糎で、月への



零

距離の約四百倍に當る。一時間三百糎の速さで飛ぶ飛行機に乗つて行くとしても、ざつと五十七年かかるわけである。

これ程遠い所にありながら、太陽は私たちに十分な熱と光を送つてくれる。夏の日の熱さから考へてみてもわかるやうに、太陽から出る熱量はすばらしいものである。太陽其のものの温度は、表面で約六千度、内部はもつともつと高熱である。

光の強さに至つては、殆ど普通の言葉で言ひあらはすことが出来ない。これを燭光しやくわうであらはすと、其の數は三の次に零を二十七つけたものになる。

濃い色ガラス、又は黒くいぶしたガラスを通して太陽を見ると、表面に黒い胡麻粒のやうなものが見えることがある。それが太陽の黒點と呼ばれるもので、見たところ胡麻粒のやうだが、實は地球より大きいのがあり、時には地球の十數倍に達するのが現れることがある。黒點は太陽の表面に生ずる大きなつむじ風だといはれ、其の數や大きさは、凡そ十一年を週期として増減してゐる。

太陽のやうな天體は、たゞ一つあるだけであらうか。かりに、太陽をもつともつと遠い所で見るとすれば、結局はあの夜の空に銀の砂子をまいたと見え

る小さな星と同じものになつてしまふであらう。つまり太陽は、夜の空に無數に輝く星の一つなのであるが、我々に近いために、特に大きく、明かるく見えるに過ぎない。廣い宇宙には、太陽と同じやうな天體が殆ど數へ切れな程存在する。さうして、其の中には太陽より小さいもの、太陽とほゞ同じ大きさのものもあるが、又太陽の數百倍といふすばらしいものがあるのである。

第二十三 關孝和

日本が生んだ數學界の偉人に、關孝和といふ人が

算

あつた。二百數十年の昔に出て、日本の數學、即ち和算の基礎きそを確立した人である。

和算といへば、或はそろばんによる算法のことだと考へる人もあらう。しかし、孝和は決してそろばんを考案した人でもなければ、そろばんの達者であつたからえらいといふわけでもない。

我が國は、もと支那から數學を學んだ。支那では、古來算木といふものを使つて、加減乗除や、開平開立等の算法を行つて來たのであるが、今から凡そ六七百年前に著しく發達して、それが代數學にまで高められるやうになつた。

立

ところで、支那では其の頃そろばんといふものが考案され、流行し始めた。さうして、それが日常の計算に非常に便利なものであつたため、何時の間にかそろばんのみが用ひられ、算木によるむづかしい數學は全然忘れられてしまつたのであつた。

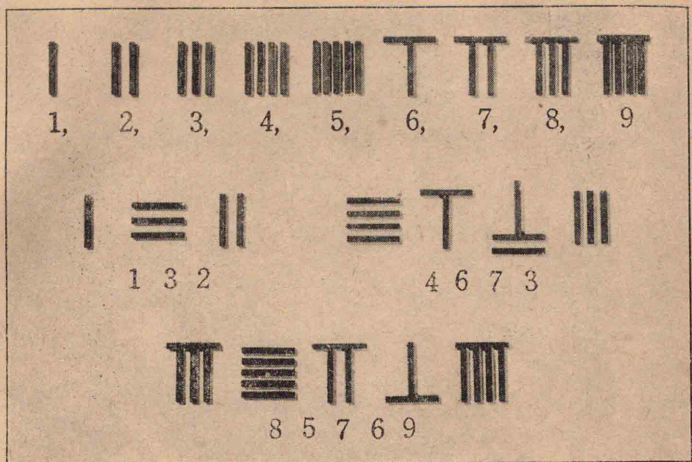
日本は、支那の算木による算法を學ぶとともに、そろばんをもまた我が戰國時代には、すでに輸入してあつたのであるが、彼の國のやうに、算木による方法を捨ててしまふことはなかつた。捨てなかつたばかりか、此の方法から導き出された我が國の數學は、江戸時代に出た關孝和の天才によつて、世界的水準に

まで高められたのであつた。

算木といふのは、長さ四五糎ぐらゐの四角柱の木である。これを盤ばんの上に縦に一本置けば一、二本並べて置けば二、五本並べて置けば五をあらはす。六以上は置方をやゝ異にするが、要するにかうして一から九までの數をあらはし得るとともに、これを種に並べ、又變化させることによつて、大きな數や式をあらはし、かつ演算することが出来たのである。

孝和は、此の算木を置く方法から考へついで、數や式を紙の上に書きあらはし、更に文字を記號として使ふことをも工夫した。かうして、彼は先づ支那傳

創



來の算木による方法を、紙に書きあらはす筆算の方法に、改めたのであるが、其の結果は、式も演算も自由自在となり、従つて今まで企て及ばなかつた數學上のことがら、次から次へと解決されるやうになつた。

世に孝和の創始する所を點竈術てんざんじゆつといふ。點竈術は、要するに筆算による代數學であつて、これによつて、支那の數學が未だかつて及び得なかつた高い域にまで進

むことが出来たのである。さうして、當時の西洋を除けば、かく代數の演算が自在に行はれるのは、ひとり我が國のみであつた。

孝和は、又、正三角形、正四角形、正五角形等の正多角形に關する算法を考案し、これを角術と稱したが、かういふものは、もちろん彼以前支那にも日本にもなかつたところである。

孝和の天才は、圓や球などの算法を工夫するに及んで、いよく、巧妙な働を見せた。さうして、其の極致は、彼の後繼者によつて、遂に西洋の微分積分びぶんに對比すべきものにまでおし進められた。

いはゆる微分積分は、孝和とちやうど同じ時代に、イギリスのニュートン、及びドイツのライプニッツによつて創始された高級の數學である。しかし、彼等がかういふものを生み出したのには、西洋諸國の學術の背景があり、數學の長い歴史があつたからで、むしろ當然の道を進んだものといへる。ひとり我が孝和に至つては、西洋の數學學術と何等關係する所なく、ひたすら和算に独自の天地を開いたのであつて、まことに文化史上の一大偉觀であるといはねばならぬ。

承

孝和の門下には幾多の人物が出て、師弟相承け相

繼いで、和算はいよ／＼進境を見せた。世にこれを關流と稱し、他の諸流に比して著しく頭角をあらはしてゐた。

明治になつて、西洋の數學が輸入されるとともに、關流を始め和算の諸流は自らすたれた。それは、當時日本が學ばねばならなかつた西洋諸種の學術を採用するため、數學もまた西洋の數學によらなければならなかつたからで、まことにぜひもないことであつた。しかし、和算にかくも發揮された日本人の天才と鍊磨があつたればこそ、我が國人が西洋の數學を容易に征服して、急速の進歩を成し遂げたので

磨

あつた。

第二十四 白洲燈臺

浪 船

小倉の北西八海里の海上に、平坦なる小島ありて白洲といふ。附近に暗礁多く、舟行自在ならず。しかも、下關海峡を出入する船舶の航路に接するを以て、古よりこゝに難破するものすこぶる多く、一朝風浪起れば、熟練なる水夫といへども、殆ど其の危険を避くること能はざりき。

小倉に近き長濱村に、難破船救助掛たりし岩松助左衛門といふ人、かゝる不幸のしば／＼なるをうれ

碎

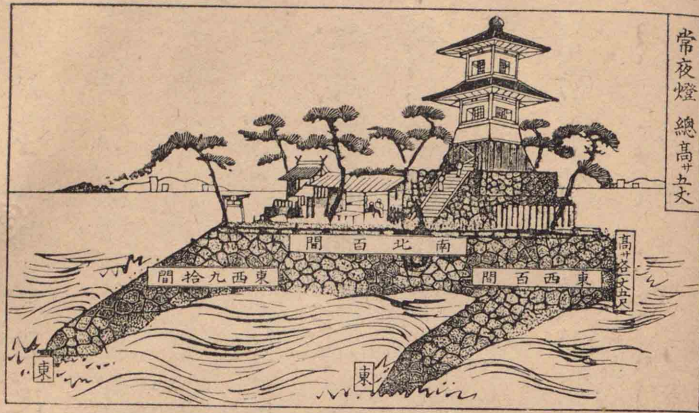
へ、如何にしてかこれを除かんものと心を碎く折から、一日暴風至り、又もや白洲の暗礁に觸れて碎破せる船あり。白洲に近き藍島あまのしまの漁夫、先づこれを救はんとして船を出したれども、名にし負ふ玄海げんかいの荒波にもてあそばれて進むこと能はず。助左衛門、波のや、靜まるを待ちて、漁夫をはげましつゝ、白洲に向かふ。からうじて至れば、島に漂着へうちやくせる十餘人、連日の苦闘に疲れ、うゑに苦しみて、五人はすでに死し、残れる者も息絶えぐゝなるさまなりき。

可許

助左衛門は、奮然として燈臺建設の事を思ひ立ちぬ。文久二年、先づ藩廳はんちやうに其の志をうつたへて許可

華國十二

府 搖



常夜燈 總高五丈

を得しが、時あたかも幕末まくまつにして人心動搖したうて、此の種の事業に着手するを得ず。空しく時の至るを待ちて、世は明治となれり。

明治元年、彼改めて政府に燈臺建設の事を出願し、翌二年に至りて許さる。

波浪高き海上の小島に、燈臺を築かんとするが如きは、今日といへども容易のわざにあらず。いはんや當時其の技術甚だ幼稚えうちなれば、

募財

苦心は殆ど想像すべからざるものあり。あまつさへ多額の費用を要する事として、彼は何よりも先づ其の調達に奔走せざるべからざりき。

總豫算三千兩、私財をことごとくなげうつといへども、十が一にも満たず。よつてあまねく世人にうつたへて、寄附を募らんとす。しかもはからざりき、此の舉に對して反對する者甚だ多からんとは。けだし當時難破船しばくあれば、これが救助を命ぜられて、手當を受くることも、またしばくなり。助左衛門の計畫にして成らんか、彼等はみすく此の眼前の利を失はざるべからざりしなり。

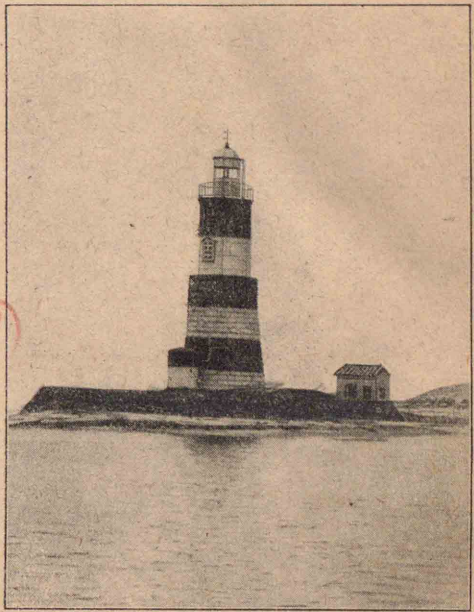
募

緒 査 共

助左衛門、ひたすら彼等を説得せんとて各地に奔走せしに、漁民等怒りて彼をおどし、甚だしきは彼を危地におとしいれんとす。しかも彼屈せずして募集に力むるとともに、一歩々々其の困難なる工事を進めたりき。

時に明治の新政やうやく其の緒につき、當局各地に燈臺を設くる必要をみとめて其の調査を開始す。かくて白洲を視察せし官吏は、助左衛門が公共のため一身を捧げてかゝる難事業に當れるを見て、感歎止まざるものありき。

白洲燈臺の建設は、政府の事業として引取られぬ。



助左衛門、平生の志實現するの近きにあるを喜びたりしが、明治五年、未だ其の成るを見ずして死せり。時に六十九歳なり。政府、彼の志を

滅

はれみ功績をよみして、遺族に恩賞をおくりぬ。
白洲燈臺は、明治六年に工を終へ、其の後又改築せられて今日に至る。下關海峽西口に當りて明滅する燈光を望みつゝ、かの助左衛門の昔を思へば、誰か其の先見と義氣に感ぜざらんや。

第二十五 雪國の春

黒い土

濃い青空には、春の國から生まれて來たかと思はれる白雲が、山のふところからぼつかり顔を出しては、見る間に大きくふくらんで、輕さうに浮いて行く。やはらかな日ざしが、窓一ぱいに降りそぐ。縁先の雪が、かさり、かさりと音を立ててくづれる。くづれた雪は、やがて雨落ちのみぞにとけ込んで、銀絲のやうにまぶしく輝きながら、ちよろちよると流れて行く。

風はまだうら寒い。けれども家々の窓も障子も一せいに明けはなされて、どこからか、カナリヤのさへづりが朗かに聞えて来る。

庭におり立つた私は、荒なはで枝を釣つた松の根もとに、そつと顔を出してゐる黒い土を見つけた。もうじつとしてほあられない。私は、其の土をしつかりと握つてみた。さうして、此の一握りの土に、ほのかな春の香を感じるやうにさへ思つた。

「ねえさん、雪の中からお人形が出て來たの。」
のんきな主人に置忘れられ、雪にうまつて冬を越した人形が、それでも暖さうな顔をして、妹の小さな手に抱かれてゐた。

「其の邊をあんまり歩いちゃいけませんよ。しやくやくや水仙が、雪の下で、もう目をさましてゐるのですから。」

不思議さうに、あたりを見まはしてゐる妹に、ほゝ笑みながら私はかう言つた。――はちきれぬやうな芽をもたげ、雪を割つてのび出ようとしてゐる物の潑刺たる力を想像しながら。

ふと、泥まみれの長靴をはいた弟が、背中あたりまで泥をはね上げて、垣に沿うた小路をどんで行くのが見えた。と、其の後を追つかけるやうに、

「もういゝかい。」

と、これは又大そう明かるい聲が、納屋（なや）のかけのあたりから、はずんで来た。

摘

せり摘み

桑畠の雪も大分へつて、あちらこちらに黒ずんだ畠の土があらはに出てゐる。ずっと向かふには、川べりに並んだはんの木が目立つ。一だんと大きなはんの木の間に、かぶつた白い手拭が見える。

「おかあさん。」

弟が大きな聲で呼んだ。立つてしばらくこちらを見てゐた母が、左手をあげた。弟がかけ出した。僕

も弟の後を追ふ。近づいてからまた弟が、

「おかあさん。」

と言つた。

三四百米も走つたので、あつくてたまらない。上着を取つて、はんの木の**下枝**にかけた。川の少し上手に、よそのをばさんもせつせとせりを摘んでゐる。僕等を見てにつこりしたので、僕は帽子を取つておじぎをした。

清水の流だといふ此の川べりは、もう殆ど雪がなくなつて、雑草が一面に芽ぐんでゐる。草の芽の間から立上る水蒸氣のかけもなつかしい。

揺

何時の間にか向かふ側に行つた弟は、土遊びに餘念がない。母は時々弟の方を見ては、またせりを摘む。母の指先が水にはいると、川底のせりの緑も、高いはんの木影も、ゆらく揺れて一つになる。

僕も、長靴をはいたまゝ、下手の浅瀬にはいつた。足もとからむくくと濁つて湧上つた水が、すぐに流れ澄んで、せりの葉並が一そう美しく見える。手を入れる。水は思つたより冷たかつた。澄んだ水の色、川べりの黒い土、草の芽の緑、此の三四箇月土を見ることの出来なかつた目には、皆たまらなくなつかしい。大自然は、今春の喜びと活動によみがへら

寛静

還汚

うとしてあるのだ。僕はもうぢき訪れる春を考へながら、あたりを見廻した。
晴渡つた空に、正午を知らせる町のサイレンが長長と響いた。

第二十六 静寛院宮

(一)

鳥羽伏見の一戦に、徳川慶喜は、はしなくも朝敵といふ汚名をかうむつた。
すでに大政を奉還した彼に、逆心などあるべきではないが、しかし何事も時勢であつた。朝臣の中に

硬

は、あくまで徳川を討たなければ、武家政治を土臺からくつがへして、新日本を打立てることが出来ないとする硬論がある。幕臣には又、三百年の舊恩を思つて、主君の馬前に討死しなければ、いさぎよしとしないや、たけ心がみなぎつてゐる。かれは「慶喜討つべし」と叫び、これは「君側清むべし」といきまく。兩々相打ち相激して遂に砲火を交へ、しかも徳川方がもろくも敗れたのである。たとへ、慶喜に不臣の心がなかつたとしても、朝敵の名をかうむるのは、けだし當然であつた。

慶喜は事のすこぶる重大なを知つて、大阪から

敗

海路江戸に歸つた。

彼は静寛院宮に事の次第を申し上げて、切に天朝へおわびのお取成しを願ひ、身は寛永寺の一院に閉ぢこもつて、ひたすらに謹慎の意を表した。

(二)

静寛院宮親子内親王は、仁孝天皇の皇女、孝明天皇の御妹、明治天皇の御叔母君で、御幼名を和宮わのみやと申し上げた。宮が御兄孝明天皇の御心を安んじ奉り、國のため民のためには水火の中をもいとほぬ御覺悟で、將軍家茂いへもちに嫁ぎ給うたのは、當時から七年前のことである。しかも、此の御降嫁による公武一和の望

嫁 嫁

はほんの東の間の夢であつた。やがて長州征伐の大事が起つて、家茂は其の陣中に薨じ、續いて杖柱とも頼み給ふ御兄孝明天皇が崩御ましくした。宮には此の兩三年、御涙の乾くひまもない御身であらせられた。

いたづらにうき年月は過ぐれどもさめぬまよひの夢の世の中

(三)

慶喜叛逆の報がいち早く江戸に達した時、宮はさすがに御憤りをお感じになつたが、慶喜の言上するところを一々お聞きになるに及んで、事情止むを得

討

なかつた彼の心中をあはれみ給うた。やさしい女性にょの御心に熱火が點せられた。われかたじけなくも皇胤くわういんに生まれたとはいへ、一度嫁しては徳川の家を離れぬが女の道、徳川の家は何とかして護らねばならぬ。そればかりか、追討の官軍が忽ち江戸表に押寄せるとすれば、徳川の恩義を思ふ舊臣たちが、おめおめと江戸城を明渡すはずはない。其の結果、江戸市中が兵火にかゝれば、百萬の市民はどうなることか。徳川の家を救ふことは、結局江戸百萬の市民を救ふことである。——宮は、御心に深く決し給ふところがあつた。

潮

一日、上臈土御門藤子は宮の御文を奉持して、東海道を西へ上つた。

官軍は、今や潮の如く東へ寄せつゝある。徳川の家は、まさに風前の燈火であつた。此の間にも、主家の難を救はうと、朝廷へ寛大の御處置を請ひ奉る歎願書をたづさへた關東方の使者は、櫛の齒を引くやうに京都へ向かつたが、何れも途中官軍に押さへられて、目的を達しない。無事京都に着くことの出来たのは、たゞ宮の御使藤子だけであつた。

(四)

宮の御文は、實に言々血涙の御文章であつた。

涙

誠

何とぞ私への御憐愍と思し召され、汚名をすゝぎ、家名相立ち候やう、私身命に代へ願ひ上げ參らせ候。ぜひく官軍さし向けられ、御取りつぶしに相成り候はば、私事も當家滅亡を見つゝ、長らへ居り候も残念に候まゝ、きつと覺悟致し候所存に候。

私一命は惜しみ申さず候へども、朝敵と共に身命を捨て候事は、朝廷へ恐れ入り候事と誠に心痛致し居候。心中

處

御憐察あらせられ、願の通り家名の處、御憐愍あらせられ候はば、私は申すまでもなく一門家僕の者共、深く朝恩を仰ぎ候事と存じ參らせ候。

徳川を討たねば止まぬの硬論を持する朝臣たちも、此の御文を拜見してひとしく泣いた。

徳川に對する朝議は、此の時から一變した。それは全く義を立て、理を盡くし情を述べて残るところあらせられぬ宮の御文の力であつた。

(五)

朝敵の汚名はすゝがれ、徳川の家名は斷絶をまぬかれた。舊臣たちは、ほつと安堵の胸を撫下した。



江戸城は、官軍方の西郷隆盛、徳川方の勝安芳のわづか二回の會見で、しかも談笑の中に開城の約が成立した。

江戸市民は兵火をまぬかれた。さうして、幸はたゞそ

れだけではなかつた。當時歐米の強國は、ひそかに我が國をうかゞつてゐたのである。現にフランスは徳川方を應援し、イギリスは薩長を通じて官軍に好意を見せようとしてゐた。若し、日本が官軍と朝敵とに分れて、長く戦ふやうにでもなつたら、其のす

きに乗じて彼等は何をしたかわからぬ。思へば、まことに危いことであつた。かう考へると、宮は一女性の御身で、徳川の家を救ひ、江戸市民を救ひ給うたばかりか、危き日本の運命をもお救ひになつたと言つて、決して過言ではないのである。

第二十七 山ざくら花

賀茂真淵

うらくとどけき春の心よりにほひ出でたる
山ざくら花

本居宣長
さし出づるこの日の本の光よりこまもろこしも
春を知るらむ

小澤蘆庵

父母の旅なるわれを思ふらむ待つらむさまのお
もかげに見ゆ

香川景樹

富士のねを木の間木の間にかへりみて松のかげ
ふむ浮島が原

加納諸平

壁立てるいはほとほりて天地にとぶるきわたる

瀧の音かな

井い手て曙あけぼの覽み

蟻ありと蟻うなづきあひて何かことありげにはしる
西へ東へ

大おほ隈くま言こと道みち

かささせるさゝぬも過ぐる橋の上の夕暮近き雨
のはれがた

野の村むら望も東と

紅のやまと錦もいろくの絲まじへてぞあやは
織りける

大おほ田た垣がき蓮れん月げつ

尋國十二

音もせずふるとも見えぬ朝じめり枝おもげなる
青柳あをやなぎのいと

高たか崎さき正まさ風かぜ

國といふ國をめぐりて日の本の人と生まれし幸
は知りにき

規模智屬磨鑛那壇郭童畑能洪
 勞級斷予繼暴慕厄糧德仁己偉
 局額憤幕趣呈導據粹請否衛猛
 敢却障后賜悟躍浦純哀缺渴謹
 邸則衆彫疾覽弊齡域劣避判賢
 介悔裁借律證犯辯刑爲旨區廷
 罰維零算創舶浪可搖府募緒查
 減摘寬汚還硬

終

昭和十四年五月三十日修正印刷
 昭和十四年六月二日修正發行
 昭和十四年六月四日翻刻印刷
 昭和十四年六月三十日翻刻發行

定價金拾六錢

著作權所有

著作兼
發行者

文
部
省

昭和十四年四月六日
 文部省檢査濟

發行所

印刷所

東京書籍株式會社工場

翻刻發行 東京書籍株式會社
 兼印刷者代表者 石川正作

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

東京書籍株式會社

小學國語讀本卷十二尋常科用

